

平成25年度

大分大学
高等教育開発センター報告書

目 次

はじめに	1
I 高等教育開発センター事業概要	2
II 各部門活動・事業報告	
1. 新規授業・カリキュラム開発部門	5
2. メディア・IT活用部門	16
3. FD・授業評価部門	27
4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門	50
III 付録	81
1. センター関係諸規則（投稿規程を含む）	
2. 高等教育開発センター運営委員会名簿	

はじめに

大分大学高等教育開発センター長
山下 茂

いつもセンターの活動にご支援、ご協力いただきありがとうございます。高等教育開発センター平成 25 年度の報告書をお届けします。

本センターの活動は、通常の業務が主となりました。通常といたしましても、これまで外部資金による各事業を積み重ねてきた成果があり、これらの継続が重要な役割となってきました。「グローバルキャンパス」、「とよのまなびコンソーシアム」、「形成的評価とコースポートフォリオ」などもうすでに業務の 1 つとなってきました。

センターの性格からしても、毎年新たな取り組みにも目を向け、検討していくことが必要となっています。今年も特筆する取り組みといたしましては、大学が取り組んでいる事業に参加した「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に対応した科目の継続、また学外での地域連携としてセンターが主体となって取り組んだ文部科学省特別経費プロジェクト「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進」が挙げられます。また、初年次教育の充実が重要視されていることに対応して、新たな科目として「分大キャンパスライフ入門」を開講しました。

本報告書では、こうした今年度の本センターの事業について、センター内に設置している部門報告として、以下の 5 つの部門ごとに、とりまとめています。

- 新規授業・カリキュラム開発部門
- メディア・IT 活用部門
- FD・授業評価部門
- 大学開放推進部門
- 生涯学習支援システム部門

本センター事業の取組みの円滑な推進は、学内教職員のご協力とご支援、ならびに学外の関係者に負うものといえます。年次報告書の刊行にあたり、この場を借りて感謝を申し上げますとともに、今後の本センターの充実・発展のために忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸いです。なお、今年度の発行が大変遅れましたことをお詫びいたします。

平成 26 年 7 月

I 高等教育開発センター事業概要

高等教育開発センターは、「学内外の関係機関との連携の下に、高等教育及び生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もって大分大学における教育及び地域社会の発展に寄与すること」を目的として設置されています。その目的を達成するための平成 25 年度の成果について、部門ごとに列挙すると以下のようなになる。

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・教養教育における初年次教育科目の検討・実施の支援
- ・高等教育協議会が設置している「とよのまなび」コンソーシアムへの支援と参加
- ・「きっちよむフォーラム 2013「学生教職員共同教育改善シンポジウム」
- ・センター業務に関わる研修報告（協議会，学会，研究会等への参加）

2. メディア・IT 活用部門

- ・グローバルキャンパスの運営
- ・遠隔授業の実施支援
- ・大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ・高等教育開発センターホームページの全面改装
- ・WebClass 操作の独学練習テキストの作成
- ・e ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ・ICT 活用通信（仮）の配付
- ・教育支援機器の貸し出し・活用支援
- ・学生スタッフの育成

3. FD・授業評価部門

- ・ポートフォリオ研究会の支援
- ・学内合同研修会「きっちよむフォーラム 2013」の実施
- ・大学院学部合同 FD 講演会，学習会の実施
- ・学生のメンタルヘルス講演会を保健管理センターと共催
- ・e ラーニング活用セミナーの開催
- ・学生による授業評価アンケートの実施

4. 大学開放推進部門

- ・公開講座・公開授業の実施
- ・社会人学生に対する学習支援
- ・社会教育関係職員等に対する研修（自治体等との連携による）
- ・大学開放に関する調査・研究の実施

5. 生涯学習支援システム部門

- ・自治体や諸団体への支援及び自治体や諸団体との共同・連携事業の実施
- ・地域指導者育成のための社会人や学生の学習の場の提供
- ・教育の協働に関するネットワークの取り組み
- ・地域社会システムに関する調査研究

6. 平成 25 年度高等教育開発センター運営委員会

第 1 回

日 時：平成 25 年 6 月 26 日（水）16：30～

場 所：旦野原キャンパス 教養教育棟会議室 1

議 題

1. 平成 25 年度各部門活動計画及び平成 24 年度活動報告について
 - 新規授業・カリキュラム開発部門
 - メディア・IT 活用部門
 - FD・授業評価部門
 - 大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

2. 平成 24 年度決算報告及び平成 25 年度予算案について

3. その他

報告

1. 平成 24 年度学長裁量経費成果報告書について
2. 特別経費「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」の実施状況について
3. その他

第 2 回

日 時：平成 26 年 1 月 23 日（木）12：20～

場 所：旦野原キャンパス 教養教育棟会議室 2

挾間キャンパス 病院第 1 会議室（遠隔会議システムを利用）

議題

1. 平成 26 年度計画・アクションプランについて
2. 奨学寄付金の受入れについて
3. その他

報告

1. 概算要求への対応について
2. その他

第 3 回

日 時：平成 26 年 3 月 26 日（水）10：40～

場 所：旦野原キャンパス 教養教育棟会議室 2

挾間キャンパス 研究棟 1 階会議室（遠隔会議システムを利用）

議題

1. 平成 25 年度業務実績報告書について
2. 大分大学公開講座講習料規程の改正について
3. その他

報告

1. 平成 25 年度公開講座・公開授業の実績について
2. 概算要求への対応について
3. 次期高等教育開発センター長及びセンター次長について
4. その他

7. 各部門会議

○メディア・IT活用部門

第1回

日 時：平成 25 年 6 月 21 日（金）

場 所：旦野原キャンパス 教養教育棟会議室 1
挾間キャンパス 第3会議室（遠隔会議システムを利用）

- 議 題
1. 【確認】平成 25 年度活動計画（資料 1～3）
 2. 【審議】教育課題の現状把握と今年度の取り組み（資料 4）
 3. その他

○FD・授業評価部門

第1回

日 時：平成 25 年 5 月 27 日（月）10：40～

場 所：旦野原キャンパス 教養教育棟会議室 1
挾間キャンパス 病院第1会議室（遠隔会議システムを利用）

- 議 題
1. 本年度の FD 計画について
 2. 授業評価アンケートの改定作業について
 3. その他

- 報 告
1. 平成 24 年度事業報告
 2. その他

第2回

日 時：平成 25 年 6 月 28 日（月）13：10～

場 所：旦野原キャンパス 教養教育棟会議室 1
挾間キャンパス 第3会議室（遠隔会議システムを利用）

- 議 題
1. FD 研修会の企画について
 2. 授業評価アンケートの見直しについて
 3. その他

○大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

第1回

日 時：平成 25 年 6 月 18 日（火）11：00～

場 所：旦野原キャンパス 教養教育棟会議室 1

- 議 題
1. 平成 25 年度事業計画について
 2. その他

- 報 告
1. 平成 24 年度事業報告について
 2. その他

第2回

期 日：平成 25 年 10 月メール審議

- 議 題
1. 平成 25 年度後期の公開講座・公開授業の実施計画について

- 報 告
1. 平成 25 年度前期の公開講座・公開授業の実施状況について

Ⅱ 各部門活動・事業報告

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

本部門は旧高等教育開発センターの高等教育開発部門を継承し、全学教育機構の設置に対応して、全学的な教育課題に関する企画・調整業務を担当する部門であり、以下の事業を行った。

【平成 25 年度の主な取り組み】

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・高等教育協議会が設置している「とよのまなびコンソーシアムおおいた」への支援と参加
- ・「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」での科目の開設を継続
- ・教養教育における初年次教育科目の実施
- ・きっちよむフォーラム 2013「学生教職員共同教育改善シンポジウム」
- ・大分大学における各部局の学位授与方針（DP）、教育課程編成・実施方針（CP）の見直しへの支援

【平成 25 年度の事業内容】

（1）全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加

全学教育機構運営会議には、構成メンバーとしてセンターから 2 名（センター長、次長）が参加し、教養科目の検討など本学の学務事項を審議している。特に教養科目カリキュラムについての検討組織である全学教育機構主題科目専門部会にセンター長、次長、専任教員 1 名の 3 名が入っており、平成 25 年度の教養教育科目の作成作業を審議した。今年度は新規に開講した教養科目として、昨年度末に準備した初年次教育科目「分大キャンパスライフ入門」を実施した。

これまで実施、参加している科目については継続している。

（2）高等教育協議会「とよのまなびコンソーシアムおおいた」への支援と参加

「地域連携研究、国際教育・留学生支援、教育連携を柱とする地方における高度人材養成拠点の構築」事業として高等教育協議会が設置されており、その 1 つとして「とよのまなびコンソーシアム」における教育連携として共同授業を実施している。現在、講義に当たるところはすべて e ラーニング（VOD による学習）で行い、2 回分（2 コマ分）ほど対面授業でグループ学習（写真）を、大分大学において行った。この講義のビデオコンテンツは、昨年度までの対

面授業で収録されたビデオを基に、コンソーシアムの共同授業分科会で選択し運用した。この授業を構成するビデオコンテンツは、今後毎年各大学においていくつか制作していくことが申し合わされている。その際、ビデオの作成やその利用の仕方においてガイドラインが必要となるためコンソーシアムの運営会議で検討し、策定を行なった。巻末に資料として掲載しておく。これらのビデオコンテンツにおいては、コンソーシアムが共有する教材として、この共同授業のほか、各大学における授業の中の教材としての利用も可能としている。しかし、その際の授業の運用については、各大学の責任において対応が必要となる。

なお、この共同授業は、大分大学と加盟大学が相互に結んでいる単位互換制度を利用するため、大分大学の授業を受講する形になっている。来年度に向けて、加盟大学から新しい科目の提供が提案され、この単位互換制度の運用について検討がなされてきた。今年度は、この形態を実施可能にし定着させるために、加盟大学間での単位互換が可能ないように制度の改正を行った。26年3月に加盟校の承認が整い、26年度から実施可能となった。



授業実施日：後期

講義科目：「大分の人と学問」

受講形態：VODによるeラーニング（13回分）と半日教室に集合しての学習活動（2回分）

具体的な到達目標：

- ① 講義内容の要約および感想・意見の記述を通して、大分の特色や課題などを他者に説明できる。
- ② 講義内容を受け、派生的な課題を自ら見つけ、1200字程度の文章として論述することができる。

評価：講義ごとのミニレポート(300字)と学期全体を通して1回の課題レポート(1200字)を、期限日を設定しオンラインによる提出。これらを成績評価する。

「大分の人と学問」講義スケジュール

講義ビデオの配信日	担当者	所属	講義タイトル
10月03日	島田達生	放送大学 大分学習センター	今よみがえる田原淳の業績 ～ノーベル賞を超える大偉業～
10月10日	荻野 哉	大分県立 芸術文化短期大学	芸術学入門 ～アートの世界～
10月17日	望月 聡	大分大学	『関あじ・関さば』を科学する
10月24日	浅野則子	別府大学	古典文学からみた大分

10月31日	立松洋子	別府大学 短期大学部	大分の『食』の現状と食育
11月07日	井上正文	大分大学	竹の研究①
11月14日	高見 徹	大分工業 高等専門学校	水環境の計測と評価
11月21日	山田繁伸	大分工業 高等専門学校	おおいたの文学碑を歩く
対面授業日 11月25日	末本哲雄	大分大学	対面授業： グループワーク (会場：大分大学 旦野原キャンパス)
対面授業日 11月25日	末本哲雄	大分大学	対面授業： グループワーク (会場：大分大学 旦野原キャンパス)
11月28日	島岡成治	日本文理大学	大分近世城下町の成立とその後 ～大分のまちの起源を探る～
12月05日	杉浦嘉雄	日本文理大学	“おおいた”の夢創造型の地域づくり ～大分からトキを再び日本の大空へ！～
12月12日	渡辺文雄	別府大学	石工と講衆 ～大分の中世石造文化を支えた人々～
12月19日	溝部 仁	別府溝部学園 短期大学	大分県の中の朝鮮半島
01月09日	石川雄一	大分大学	おおいた過疎地域を元気にする産学連携 ～柚子の抗アレルギー能について～

今年度の履修状況については、下記の表に示してある。全体的に参加者が少ない傾向がみられる。次年度に向けて検討を要するであろう。

	大分大学	大分県立芸術 文化短期大学	日本文理大学	別府溝部学園 短期大学	立命館アジア 太平洋大学
登録者数	19名	1名	0名	DVD 貸出	20名
単位取得者数	15名	1名	—	—	11名
修了率	79%	100%	—	—	55%

合計登録者数：40名

もうひとつのコンソーシアムの事業である生涯学習支援としての連携講座部門では、「大分地域大学等連携講座」を今年度も実施し、これも昨年度の実績のもと充実したプログラムが展開できた。また、今年度は、新しい取り組みとして「豊の国学」を開設した。これは、今後部門の事業展開の方向性を検討した結果として取り組まれた。来年度は、大分駅南にできた大分市の施設「ホルトホール」内を会場として開講される予定である。詳細は、大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門の報告を参照されたい。

(3) 教養教育における初年次教育に向けた新科目の検討と準備

教養教育の充実に向けた取り組みとして、大学4年間の各自のキャリアを意識し、学修する動機や人間的成長、社会人力の養成を支援する科目群の開設や検討を行っている。今年度は、特に教養科目の中における新しい柱に向けた取り組みを実施した。

① 「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に対応した科目の継続

大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門の報告を参照されたい。

② 初年次教育と科目「分大キャンパスライフ入門」<新規開設科目>

大学におけるカリキュラムとして近年「初年次教育」が普及している。本学でも、1年次における「基礎ゼミ」「基礎演習」等の必修科目が設定されている。しかし、これらのリテラシー的なカリキュラムだけでなく、自分たちの意識、態度の変容を促し、学修意識、キャリアデザインへの意識を身に付けていくことも伴うことがディプロマポリシーの達成には必要と考えられる。これらを考慮し、学修環境としての生活における人間関係や社会との関係をとおした成長を支援するため、メンタルヘルス、コンプライアンス、キャリアデザインなどの観点も取り入れた科目の設定をすることになった。昨年度末にかけて教務部門会議で検討した結果、次年度に「分大キャンパスライフ入門」を開設することになりシラバスを策定し準備を整えた。シラバスの一部を掲載する。

上記の検討結果をふまえて、今年度の授業は、下記のように実施した。

【授業のねらい】

大学に入ると、とたんに大学生としての自覚や社会人としての自律が求められるほか、学習においても高校までとは違うタイプの学びや学生生活が求められてきます。本授業では、そのような移行を果たすための機会を提供します。また、この授業は各学部の初年次ゼミ・演習と補完して学んでほしい科目でもあり、大分大学の一員、地域の一員、社会の一員であることを意識し、学修や学生生活を考えてもらう学習を行います。

【具体的な到達目標】

- ・講義で取り上げた学生生活上の課題、問題を分析し、適切な対応法を説明できる。
- ・学習面での自己管理と自律を具体的な行動で示し、記録をもとに改善点を見いだすことができる。
- ・他者と協調して学び合った経験を有し、そのエピソードを説明することができる。
- ・所属している学部について、高校生に簡単な説明ができる。

平成25年度 前期水曜3限 「分大キャンパスライフ入門」 実績

	日 付	「授業内容」 講師（敬称略）（所属）	出席者数
第1回	4月10日(水)	「大学の起源, 機能, 日本の大学」 大嶋誠（大分大学名誉教授）	73名
第2回	4月17日(水)	「イコールパートナーシップ」 二宮孝富（大分大学名誉教授）	38名
第3回	4月24日(水)	「学生生活では市民としての自覚を」 宇都宮妙（たえ法律事務所弁護士）	63名
第4回	5月1日(水)	「大学生としての法律」 石川公一（大分大学監事）	73名
第5回	5月8日(水)	「裁判員制度について」 渡邊典行（大分地方裁判所刑事次席書記官）	71名
第6回	5月15日(水)	「学生は市民の一員ー地域的・地球的視点でー」 羽野忠（大分大学前学長・名誉教授）	72名
第7回	5月22日(水)	「学健康への意識とメンタルヘルスについて」 藤田長太郎（大分大学教授保健管理センター長）	71名
第8回	5月29日(水)	ワークショップ「前半の授業の振り返り（新聞の構想）」	72名
第9回	6月5日(水)	ワークショップ「新聞の完成と評価」	72名
第10回	6月12日(水)	「将来の未来予想図こそキャリア形成の第一歩」 水野雅美（大分大学学生・キャリア開発課課長）	72名
第11回	6月19日(水)	「大学におけるキャリア形成には」 中川忠宣（大分大学高等教育開発センター教授）	71名
第12回	6月26日(水)	「情報の作られ方とメディアの活用法」 清田透（大分合同新聞執行役員編集局統合編集長）	69名
第13回	7月3日(水)	「情報化社会における付き合い方」 七條麻衣子（ハイパーネットワーク社会研究所主任）	71名
第14回	7月10日(水)	ワークショップ「授業の振り返り」	67名
第15回	7月17日(水)	ワークショップ「相互評価, 発表」	63名

実施成果は、75名登録があったが、最後まで75名が履修しており、15週ほぼ出席率が9割

以上（健康診断時を除き）を維持していた。これは大人数科目の教養科目としては驚異的な数字である。

しかも、初年次の履修者が 69 名（教育福祉科学部 13 名，経済学部 32 名，工学部 24 名）あり，ほぼ目的の履修状況であったといえる。

授業の振り返り [グループ学習] 実施概要

授業の振り返りを目的に，グループ学習の方法を取り入れ，授業内容を語れる力，企画力，表現力，発言力，チーム参加力・・・を学修する授業企画を立てた。

虚構新聞 (<http://kyoko-np.net>) のスタイルを参考に，これまで 7 回の講義を分担し，その内容に関する架空の新聞記事を書き，グループが一丸となって「・・・新聞」を発行する授業内容である。グループ評価（グループでの相互評価）と個人評価（教員の評価）を行った。

出席者数：1 回目（5/29）72 名，2 回目（6/5）73 名

（４）センター教員の教養科目等の担当

これまでの専任教員が実施してきた科目の継続を実施できた。昨年度から専任教員として末本哲雄先生が授業担当に加われ，先生の新設科目「科学技術コミュニケーションのデザインと実践」を開設してもらい，前期 6 科目，後期 9 科目を実施した。センターの役割から，取り組んでいるプロジェクトに応じた多様な教育方法を取入れた授業となっている。

【前期】

- ・生涯学習論入門
- ・学習ボランティア入門
- ・社会教育からみた「教育の協働」
- ・大分大学を探ろう
- ・生命観の変遷
- ・自然体験活動の理論と実践

【後期】

- ・キャリアデザイン入門
- ・成人教育方法入門
- ・プロジェクト型学習入門
 - 「仕事・若者・キャリア」
 - 「中小企業の魅力大発見」（後期集中）
- ・アカデミック・スキル入門－社会教育計画を題材に－
- ・科学技術コミュニケーションのデザインと実践
- ・カラダの見方・考え方
- ・里海と里山Ⅱ（後期集中）
- ・大分の人と学問（とよのまなびコンソーシアムおおいた共同授業）

(5) 「きっちよむフォーラム 2013 「学生教職員共同教育改善シンポジウム」

このフォーラムは、FD・授業評価部門の事業であるが、授業やカリキュラムの検討の場でもあり、本部門も関連している。今年度のテーマは、これまでセンターが中心となってきた、授業評価の今後を考えるための振り返りと意見交換を目的として設定した。プログラムは下記のとおりで実施した。

日時 2013年11月27日(水) 13:10～14:40

場所 且野原キャンパス：図書館ラーニング・コモンズ A

狭間キャンパス：医学図書館 2階多目的室（遠隔配信）

テーマ「学生の主体的な学修を促進する ―“新時代”を迎えた図書館とともに―」

1. 学生からの調べ学習の成果報告（30分）

- ・教養科目「成人教育方法入門」受講生による報告
- ・課題解決学習を進めるための図書館への提案

2. 図書館の活用（30分）

- ・新装された図書館の機能と利用法
- ・図書館を利用する学生の実態
- ・図書館での新しい学修支援

3. 全体討論

- ・学生の学修を深めるためにできることは何か

詳しい報告は、FD・授業評価部門に掲載している。

(6) センター業務に関わる研修報告（協議会、学会、研究会等への参加）

本年度における本部門関係者の出張、研修は、

「全国大学教育研究センター等協議会」（2013/9/5-6 金沢大学、石川）

「大学教育学会 課題研究会」（2013/11/30-12/1 同志社大学、京都）

「日本高等教育学会」（2013/5/25-26 広島大学、広島）

「高等教育質保証学会」（2013/8/23-24 京都大学、京都）

「大学教育研究フォーラム」（2014/3/18-19 京都大学高等教育開発推進センター、京都）

（参考：<http://www.he.oita-u.ac.jp/publication/ict-news/pdf/No.011.pdf>）

「大学 ICT 推進協議会」（2013/12/19-20 幕張、千葉）

などに出席した。質保証、評価、ラーニングアウトカム、ポートフォリオ等の話題についての多くの調査や議論ができ、センターの業務に活かしていける有益なものであった。

この中で、特に現在本学での課題となっている「学士課程教育の質保証」に参考となる記録として、「大学教育学会 課題研究会」の概要（資料1）、基調講演と開催校企画シンポジウム（資料2）の報告を掲載する。

＜資料 1＞

大学教育学会 2013 年度課題研究集会

「大学教育の質的転換の方向性を問う」 参加報告（山下による）

2013 年 11 月 30 日，12 月 1 日 同志社大学今出川キャンパス

【基調講演】 「アメリカにおける共通教育の方向性」

講演講師 Dr. Caryn McTighe Musil

基調講演では，AACU の Musil 博士により米国で共通教育において取り組まれている「ActiveCitizen」というコンセプトについて紹介があった。アクティブ・ラーニングの学習スタイルで初年次から実施されているプログラムで，教養教育の新しいキーコンセプトといえるものであった。今後の教養教育，リベラルアーツを見直していくうえで非常に有益な公演であった。

※詳細な報告は，高等教育開発センター末本氏の報告（資料 2）を参照

【開催校企画シンポジウム】 「大学教育の質的転換の方向性を問う」

「大学教育の質的転換に向けて：中教審答申と今後の課題」

河田 悌一氏（日本私立学校振興・共済事業団理事長，中央教育審議会委員）

「アクティブ・ラーニングの是非を問う：主体的かつ効果的な学びの実現に向けて」

飯吉 透氏（京都大学）

「アクティブ・ラーニングを通じての学生の学びとそれを支える環境」

山田 礼子氏（同志社大学）

（資料 3）を参照

※【基調講演】「アメリカにおける共通教育の方向性」は，大変参考になる講演であった。

「大学教育学会 2013 年度課題研究集会」の末本氏の出張報告書に概要が記載されている。

＜資料 2＞

◆「アクティブ・ラーニングを通じての学生の学びとそれを支える環境」

山田 礼子氏（同志社大学）

中教審が 2010，2012 年に答申した，これから求められる大学教育については，学士課程の質保証を要請してきた。主な観点は，学習時間の確保，主体的学びの確立であろう。これらへの対応として，アクティブ・ラーニングが注目する教育・学習方法の 1 つとして要請されている。これを同志社大学で取り組んだ実践を引き合いにして，大学教育への有効な取り組みであることを講演した。

レジュメから

【1】 2012 答申の問題意識

- ・学生の主体的な学びを確立させるための始点 → 十分な学修時間の確保
- ・学士課程，教育課程の改善の責任が大学にあることを明確化

↓

- ・教学マネジメント・ガバナンスの改善
- ・具体的な改善への手段や制度の導入

【2】 問題の設定と発表の目的

・「学生が目的意識を伴って受け身ではなく，学びに主体的に関わり，何らかの学習成果につなげること」を主体的な学びと定義し，間接評価データから以下を把握する

*アクティブ・ラーニングを通じて学生は主体的な学びを促進しているのか？

*アクティブ・ラーニングを支える環境として設置されたラーニング・コモンズの効果は？

【3】 学修時間と授業への出席時間

- ・全体的に少ない学修時間
- ・授業以外での学修時間が0時間である学生がいずれの分野にも一定の割合で存在
- ・社会科学系の学生の学修時間が相対的に低く，人文系の学生の学修時間も同様に低い
- ・1学期に履修する授業数が多い

↓

主体的な学修時間の確保はなされていない

【4】 継続データからの示唆①

- ・ゆっくりだが着実に学習成果は上がっている
- ・何が上昇させている要因なのか？

教育方法：アクティブ・ラーニングの効果は？

中教審答申案においても「アクティブ・ラーニング」の導入の進捗が提示

多くの大学が事実「アクティブ・ラーニング」を導入しつつある

【5】 継続データからの示唆②

- ・アメリカの学生の方が学修時間はかなり長い
- ・しかし，学修時間の確保については，アメリカの大学においても学修時間の減少が指摘
1週間15時間以下の授業外学習時間の割合は51%

(Center of Inquiry at Wabash College 2013 より)

・アメリカでもいかに学生が主体的な学びを確保できるかということが最近の1年間の重要なテーマ

- ・具体的には，学生の「Engagement」を増加させるための方策についての研究や提案
- ・その1つが，学生を主体的にかかわらせる授業方法や

授業内容：アクティブ・ラーニングの研究や実践，それを支える環境の研究が蓄積

【6】 アクティブ・ラーニングがなぜ注目されるのか？

・パラダイムシフトの転換

「教員中心(teacher-centered)」から 「学習者中心(learner-centered)」へ

「何を教えるか」から「何ができるようになるか」。

教育活動の中心目標の移行が促進され、双方向型のアクティブ・ラーニングが効果的という認識が共有。

【7】 何故アクティブ・ラーニングか？

・ポスト近代社会においては、知識伝達型から新たなティーチングとラーニングの形態へ移行
・基礎学力、標準性、知識量、順応性等の能力は従来からの知識伝達型のティーチングとラーニングでも可能

・しかし、多様性、創造性、チャレンジ性、個別性、能動性、リーダーシップ性などは知識伝達型、暗記型では達成することには限界

・実践知、応用知の獲得にはアクティブ・ラーニングとの親和性

【8】 アクティブ・ラーニングとは？

・実社会で直面する複雑・多様な正解が一つではない課題に適切に対応できる思考力、創造力および課題探求能力を育成するために効果的な手法であり、体験学習、ディスカッション、学生のプレゼンテーションによる双方向対話型の授業あるいは学生が自ら資料や文献を探し、授業の事前・事後の学習に関わる等も含まれる。

・アクティブ・ラーニング＝「能動的な学び」

・パッシブ・ラーニング＝「受動的な学び」

・しかし、講義形式であっても、受動的な学びとみなす必要はない。主体的に、学ぶのであれば能動的な学びの範疇に入る

【9】 アクティブ・ラーニングの手法

①質問の活用 ②議論の活用 ③ビジュアルの活用

④ライティングの活用 ⑤問題解決 ⑥コンピューターの活用

⑦協働学習 ⑧ディベート ⑨ドラマの活用

⑩ロール・プレイングやシミュレーション・ゲーム ⑩ピアティーチング

【10】 授業外学習とアクティブ・ラーニング

・授業外学習時間を増加させ、学主が主体的に学ぶ仕組みを構築する必要性

・その際、そうした人為的な環境をつくることも不可欠

・学生が自ら学ぶ、自ら動く、企画するといった学生文化がもともと同志社には存在

・そうした学生文化を授業外学習に活かすための装置・仕掛けを企画

・ラーニング・コモンズとそこにかかわる教員を常駐

・教員は有期教員3人がラーニング・コモンズに常駐

【11】 まとめ

- ・アクティブ・ラーニングを促進するための環境，教授方法はカレッジ・インパクトとして不可欠
- ・アクティブ・ラーニングは学生，の主体的な学びへのエンゲージメントと関係がある
- ・ラーニング・コモンズは授業外学習を通じての主体的な学びへのエンゲージメントを促進する
- ・教学マネジメント，ガバナンスが機能することが前提

補足：同志社大学ラーニング・コモンズ

学びを転換させる1つの学ぶ環境として，図書館とは別にラーニング・コモンズを設置
利用状況

- ・1日 3000 人の利用者数
- ・多くの学生が利用
 - 例：1つの身に着ける態度として「ルールを守る」
→ アクティブなシチズンになる
- ・学生の文化があるかどうか
 - 同志社・・・歴史，学風，町の特性
大学のまわりに多くの大学がある→学生の行動が他大学とのかかわり

2. メディア・IT 活用部門

メディア・IT 活用部門では、「多様なメディアを活用し、授業形態の多様化を図るとともに、自由な学習機会の拡充を進める」という中期計画のもと、情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）を活用した教育活動の推進を支援している。特に ICT を活用した学習環境の整備、ICT 活用型授業の支援、授業方法の改善に向けた相談、eラーニング教材の開発、学習メンタリングを通して、本学における教育課題の解決を目指している。

【平成 25 年度の主な取り組み】

- ① グローバルキャンパスの運営
- ② 遠隔授業の実施支援
- ③ 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ④ WebClass の活用支援と普及
- ⑤ e ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ⑥ ICT 活用通信（仮）の発行
- ⑦ 教育支援機器の貸し出し・活用支援
- ⑧ 教材の作成
- ⑨ 学生スタッフの育成
- ⑩ メディア・IT 活用における国内の動向～研修・会議を通して～

【平成 25 年度の事業内容】

（1）グローバルキャンパスの運営

メディア・IT 活用部門では、高等教育開発センターの Web サイトを通じて講義や講演会などのビデオ配信を行っている（<http://he-ogc.he.oita-u.ac.jp/>）。この事業を「グローバルキャンパス」と呼び、平成 19 年度より継続して行っている。配信されたビデオは受講生の復習や欠席者の補習、遠隔地での非同期的学習、授業担当教員のふり返し、発表や活動の記録、生涯学習や地域貢献などに使われている。

1) 講義ビデオの収録と配信

2013 年度は 150 件（前期 8 科目 86 件、後期 7 科目 64 件）の講義ビデオをグローバルキャンパスに掲載した（表 1）。2012 年度（掲載数 203 件）に比べ、2013 年度は 50 件ほど減少した。この理由として、特別経費プロジェクトの終了に伴って従来のような学生スタッフ数の雇用できなくなったこと、閉講した科目があること、前年度までの講義ビデオを使用するため新たに講義を撮影する必要がなくなったことが挙げられる。撮影や編集などの人的労力や予算措置の状況を考慮すると、今後も継続的に量を増加させていくことは難しく、数量以外での評価に転

換する必要がある。また、動画配信サーバの老朽化が進んでおり、機器の切り替えも視野に入れて次年度の運営を考えなければならない。

表 1. グローバルキャンパスへの掲載科目（2013 年度）

実施時期	教員名（所属）	講義名
前期	岡田正彦（高等教育開発センター）	生涯学習論入門
	牧野治敏（高等教育開発センター）	生命観の変遷
	中川忠宣（高等教育開発センター）	学習ボランティア入門
	岡田正彦（高等教育開発センター）	
	末本哲雄（高等教育開発センター）	科学技術コミュニケーション入門
	真鍋正規（工学部）	建築設備計画 I
	山崎清男（教育担当理事）	分大キャンパスライフ入門
	藤野幸嗣（工学部非常勤）	高度情報化と社会生活
	末本哲雄（高等教育開発センター）	論考の基礎
後期	牧野治敏（高等教育開発センター）	カラダの見方・考え方
	山崎栄一（教育福祉科学部）	日本国憲法
	小林 正（工学部）	物理学実験
	江島伸興（医学部）	応用数理学
	末本哲雄（高等教育開発センター）	科学技術コミュニケーションの デザインと実践
	真鍋正規（工学部）	建築環境計画 II
	末本哲雄（高等教育開発センター）	探求の基礎

2) 講演会ビデオの収録

グローバルキャンパスでは講義ビデオ以外にも、講演会やシンポジウムなどの配信を行っている。2013 年度も FD 講演会などを収録し、一部はホームページを通じて配信した（表 2）。

表 2. 2013 年度に収録した講演会

実施時期	主催	講演名
04 月 02 日	高等教育開発センター	特別経費「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」での取り組み
04 月 06 日	大分大学事務局	学生生活と法
11 月 27 日	高等教育開発センター	きつちよむフォーラム 2013 「学生の主体的な学修を促進する —“新時代”を迎えた図書館とともに—」
12 月 14 日	高等教育開発センター	e-Learning 活用セミナー 「教育の質向上のための e-Learning」

(2) 遠隔授業の実施支援

且野原キャンパス教養教育棟 35 号教室と挾間キャンパス医学部 211 号教室には、インターネット経由で教室の映像と音声を相互に伝送できるテレビ会議システムが導入されており、学期中は毎週、このシステムを使って遠隔授業を行うこととなっている。

2013 年度には「生命観の変遷」（前期火曜日 1 限目：且野原から挾間）、「日本国憲法」（後期月曜日 4 限目：且野原から挾間）、「応用数学」（火曜日 1 限目：挾間から且野原）の科目を遠隔授業として実施した。メディア・IT 活用部門では、昨年度と同様にテレビ会議システムとネットワークカメラの操作、講義映像の収録にて遠隔授業を支援した（図 1）。

年度を通してネットワークシステムに特筆すべきトラブルは起きず、全ての授業回において遠隔講義を実施できた。操作担当者が変わっても安定して運用できる体制が構築できたと言える。

なお、遠隔授業関連の業務にあたり、教育支援課教育推進グループの岡村氏と後藤氏に多大な協力をいただきました。深く感謝いたします。



図 1. ネットワークカメラ（左）と操作システム（右）

(3) 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援

昨年度と同様、とよのまなびコンソーシアムおおいとの共通教育科目として「大分の人と学問」が開講された。これは Web サイト上で講義ビデオを視聴して課題を提出するという e ラーニング形式の授業である。

メディア・IT 活用部門では、10 月から 2 月末まで e ラーニングシステム（Moodle）を教養教育棟 1 階電算室のサーバで稼働させ、講義ビデオの配信やレポート提出場所の設置をはじめとする学習環境の整備を行った（図 2）。62 名の利用登録があったが、授業期間中には特筆すべきシステムトラブルもなく、予定通り授業を完遂できた。

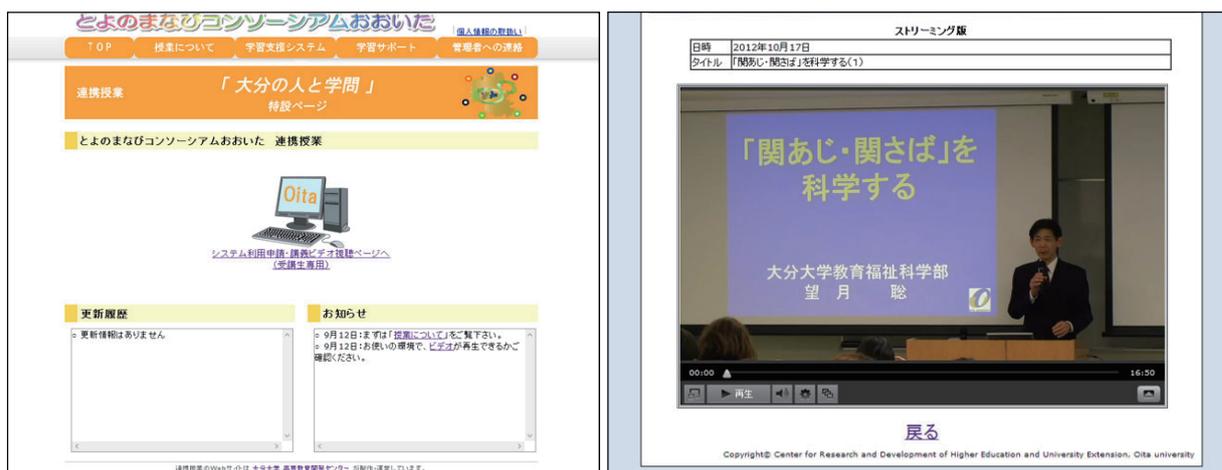


図2. 「大分の人と学問」専用 Web サイト（左）と講義ビデオの視聴画面（右）

（4）WebClass の活用支援と普及

本学では学習管理システム（LMS：Learning Management System）として WebClass（日本データパシフィック社）を導入している。科目ごとに「コース」を開設しておけば、担当教員と受講生は Web 経由で講義資料の配付、テスト/アンケート、Web 掲示板などの機能を利用できる。システムの運営や管理は情報基盤センターが行っているが、各授業担当教員への普及や利用支援については本部門が中心となって担当している。

1) 講習会の開催

WebClass には多様な機能が備わっているが、これらを利用するためには操作方法を習得しなければならない。そこで定期的に教員向けの操作講習会を開催している。本年度は以下の日程で WebClass 講習会を実施した（表3）。

表3. WebClass 関連講習会の実施

月	日	曜	テーマ	参加数
7	04	木	WebClass の基本機能3つ	5
8	04	金	後期に向けた WebClass の利用準備	1
12	14	月	e-Learning 活用セミナー	6

2012 年までに作成した操作練習書や対応方法の蓄積によって、講習会の内容がかなり充実してきたと言える。その一方で、参加できる時間が合わないとの意見もあり、次年度以降は開催日時や回数を再検討する必要がある。ただし、高等教育開発センター主催の講演会では集客力が弱く、どの時期にやっても参加人数 5 名を超すことは滅多にない。そのため、学部でオンライン化された講演会として企画するか、講習会の開催自体に重きをおかずに電話やメールでの相談を積極的にアピールするといった路線変更も視野に入れる必要がある。

(5) eポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及

1) 講習会の開催

平成 22 年度から、本学では WebClass の追加機能として「eポートフォリオ・コンテナ」を導入している。eポートフォリオ・コンテナは、WebClass 上で提出された学生の成果物に対して他の受講生からの相互評価活動を円滑に進める機能を与える。すなわち、「計画」－「実施」－「評価」－「省察」のサイクルを回すことを学習と捉え、「受講生が成果物を自ら評価するとともに、他の受講生や教員から評価をもらい、何度も何度も改善を繰り返しながら成果物の質を高めていく活動」を支援する機能である。

この eポートフォリオ・コンテナの学内普及のため、本部門では継続的に講習会を実施している。2013 年度は以下の日程で eポートフォリオ・コンテナ関連の講習会を行った（表 4）。

表4. eポートフォリオ・コンテナ関連講習会の実施

月	日	曜	テーマ	参加数
7	25	木	人の授業デザインを見よう ～「科学技術コミュニケーション入門」の授業設計～	1
8	22	木	eポートフォリオ・コンテナを使った授業スタイルの提案 ～個人もしくはグループの活動に相互評価を取り入れる～	1
12	14	月	e-Learning 活用セミナー	6

2) eポートフォリオ・コンテナを活用した科目

表 5 は 2013 年度に eポートフォリオ・コンテナを活用した科目の一覧である。本年度は工学部と経済学部での利用が拡大し、特に演習科目での利用が増加した。実際に成果物を作らせ、それを相互評価させることでさらなる学びにつなげようとする科目では親和性が高いためと思われる。一方、教養教育科目については昨年度とほぼ同じ科目が並んだ。さらなる利用拡大に向け、学内広報に努めていきたい。

表5. eポートフォリオ・コンテナを活用した科目

教養教育科目	
1. 自然体験学習の理論と実践	5. 論考の基礎
2. 科学技術コミュニケーション入門	6. 探究の基礎
3. 科学技術コミュニケーションのデザインと実践	7. 大分大学を探ろう
4. 成人教育方法入門	
専門教育科目	
1. 基礎演習 I	11. 情報基礎演習
2. 基礎演習 II	12. 情報処理演習
3. 中級演習 II	13. 数値情報処理
4. 演習 II	14. マルチメディア

5. 演習 IV	15. マルチメディア処理
6. 学問探検ゼミ	16. マルチメディア処理演習
7. 経済学 I	17. プログラミング言語演習
8. 地域と財政	18. 情報システム II
9. ゼミ	19. ネットワーク基礎演習
10. 卒業研究	20. コンピュータ英語

表6は、導入した2010年から2013年度末までのeポートフォリオ・コンテナの利用科目数とその中で提出された学習成果物の数である。年度を追うごとに導入科目数が増えていることが分かる。成果物数については、eポートフォリオ・コンテナを採用した科目の受講生数に依存するので、一概には比較できないが、この3年間で1000を超えるほどに利用されるようになった。

表6. eポートフォリオ・コンテナの利用科目数と成果物数

年度	科目数	成果物数
2010	4	147
2011	9	1191
2012	18	1485
2013	27	1103

(6) ICT活用通信(仮)の発行

学内のICT活用教育の推進を図るため、2011年度からA4用紙裏表1枚にWebClassの操作手順や活用例、教育支援機器の情報を掲載した通信を教員に配付し始めた。

2012年度末までに11号の通信を発行しており、2013年度は第12号と第13号をした(表7)。

なお、通信のバックナンバーはPDFファイルとして高等教育開発センターのホームページに掲載している(<http://www.he.oita-u.ac.jp/publication/ict-news/>)。

表7. 本年度に発効したICT活用通信(仮)の内容

No.	タイトル
第12号	教育支援機器の展示会案内とWebClassの一括登録のバージョンアップ
第13号	プレゼン資料共有サービス"Slidrs"の紹介

(7) 教育支援機器の貸し出し・活用援助

高等教育開発センターでは、学内教員を対象に教育支援機器の貸し出しを行っている。

2013年度は69件の貸し出しを行った(表8)。昨年度と同様、貸し出し数の多い機器はノートパソコン、クリッカー、iPadであった。

表8. 平成27年度の貸し出し実績

物品	回数	物品	回数
ノートパソコン	22	デジタルカメラ	3
クリッカー	24	デジタルビデオカメラ	4
iPad	10	プロジェクター	1
iPod Touch	4	レーザーポインター	1
総計			69

1) ノートパソコン

教員の話を集約すると、ノートパソコンは主にインターネット検索(英語辞書の利用やグループワークでの関連情報の探索)、インターネットのアプリケーション(WebClassなど)の利用、Microsoft Wordを使ったレポート文書作成、PowerPointを使ったプレゼンテーションスライドの作成と発表に利用されているようだ。ある教員から「従来の講義形式では、学生に話をしてノートをとらせるばかりであったが、ノートパソコンを利用するようになって色々な活動が試せるようになった」との旨の感想をもらっている。

貸し出す機種の手配に慣れず、数名の学生から使いづらいとの不満がでているものの、特筆すべき目立ったトラブルは発生していない。マウスを使わないとカーソルが動かない端末、無線LANが使用できない端末がそれぞれ1台ずつあるが、天板と画面下に大きなラベルを貼ることで教室でのトラブルを避けるようにしている。

2) クリッカー

クリッカーとは、講義中に受講生へ出した質問に対する回答をリアルタイムで可視化する投票ツールである。クリッカーの使用により、教員が一方的に話すだけの講義から脱却し、双方向性を高めた授業展開を作りやすくなる。

現在、高等教育開発センターには150個のクリッカー端末と3本のレーザー(KEEPAD KAPAN社のTurningPoint)が用意されており、主に教養教育の授業を対象に50個単位で貸し出しを行っている。また、教育福祉科学部・経済学部・工学部の学務係には50個の端末と1本のレーザー、医学部には100個の端末と2本のレーザーを置いてあり、使用予定が重複しなければ、教員は誰でも利用できるようになっている。

表9は、2013年度に高等教育開発センターからクリッカーを貸し出した科目である。昨年度に比べ、専門科目への貸し出し数が増加した。また、工学部の「マルチメディア処理演習」においては、クリッカー端末と個人とをひもづけ、回答結果を個人の成績に反映させるという授業スタイルも試みられた。こうした事例からも徐々にクリッカー利用が学内に浸透してきてい

ることが分かる。

導入から 3 年近くが経ち、講義での使用回数も 2 桁に達した、いわゆる脱初心者の教員が増えてきている。そのため、次年度はより教育効果の高い授業設計ができるような設問の作り方に関する講習会を企画してきたい。

表9. 高等教育開発センターからクリックカーを貸し出した科目

No.	科目名	No.	科目名
1	生命観の変遷	7	大分の水 II
2	カラダの見方・考え方	8	生活科指導法 (小)
3	革新的企業経営	9	探求の基礎
4	経営情報論	10	自然とゆらぎ
5	カラダの見方・考え方	11	生涯学習論入門
6	マルチメディア処理演習	12	基礎演習 I

3) iPad

2012 年度から 40 台の iPad を高等教育開発センターの貸し出し物品に加えている。

昨年度に引き続き通常の貸し出し業務や操作手順書の作成、留学生用の音声アプリの利用支援に加え、2013 年度は iPad 活用教育の周辺に関わる利便性向上に取り組んだ。具体的には、「slidrs」アプリを使い、通常は教室前のスクリーンにのみ表示される講義スライドを学生の手元にリアルタイムで切り替えながら表示させる方法の提案や iOS アプリを 40 台に一括インストールできる方法の導入である。さらに夏休みの教員免許更新講習において、教育福祉科学部の教員による新しいメディアを活用した授業方法の紹介と体験にも本センターの iPad を貸し出した。

(8) 教材の作成

2013 年度、日高貢一郎先生 (教育福祉科学部)、近藤隆司先生 (工学部)、武原美穂先生 (国際教育研究センター) からの依頼を受け、方言ビデオ、物理教材の操作説明ビデオ (表 10, 図 3)、留学生用の日本語音声教材 (表 11) を作成した。

表10. 「数式で答える e ラーニングコンテンツの操作説明ビデオ」のタイトルと時間

タイトル	時間
(1) オープニング	(1 分 55 秒)
(2) WebClass へ	(1 分 20 秒)
(3) 答えを入力する	(5 分 36 秒)
(4) 数式を入力する	(6 分 16 秒)
(5) 複雑な数式を入力する	(3 分 19 秒)
(6) 物理を学ぶ意義	(2 分 21 秒)

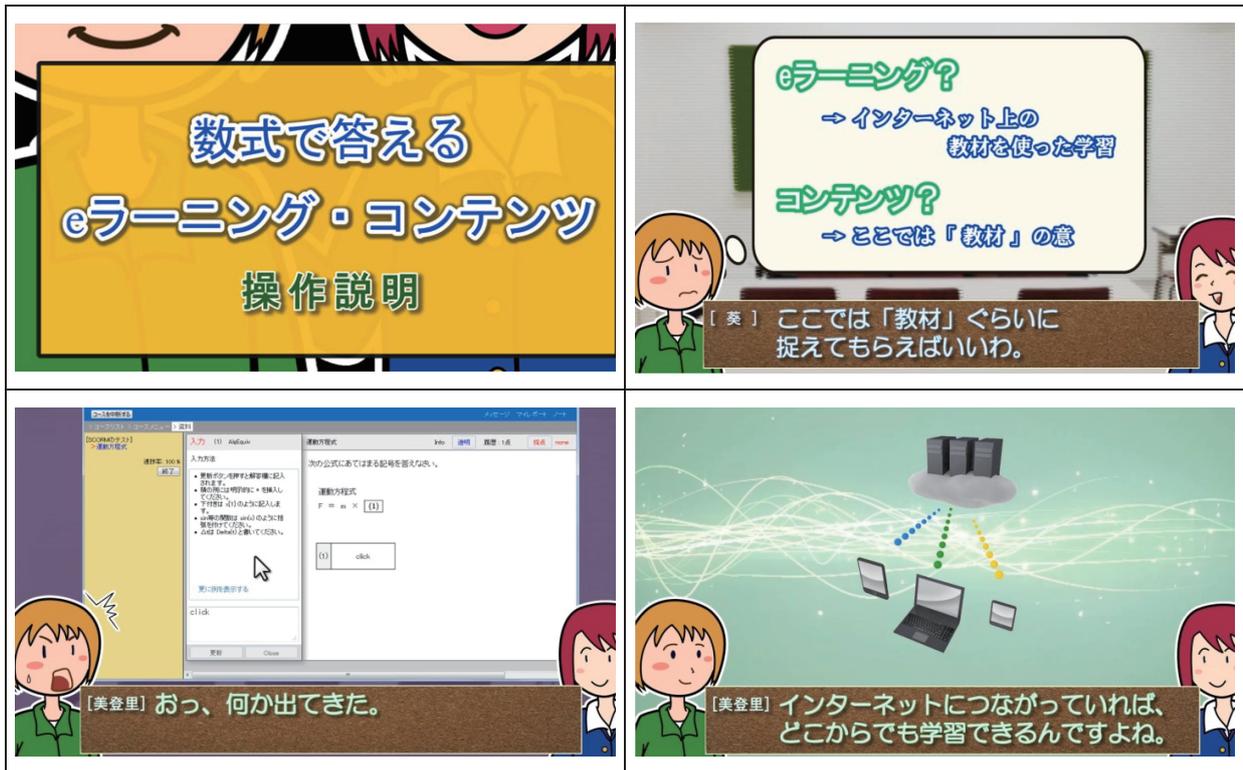


図3. 「数式で答える eラーニングコンテンツの操作説明ビデオ」の画面

表10. 留学生向けの日本語音声教材

タイトル	
(1) 手紙	(6) 野菜のむし煮
(2) ホームステイ	(7) 一休さん
(3) 日記	(8) 時流語源 (雑誌のコラムから)
(4) 遅刻	(9) ホームパーティ
(5) 本の紹介	

数式で答える e ラーニングコンテンツの操作説明ビデオについては、以下のようなフィードバックを得た。

2013 年度までは e ラーニング教材の操作方法を学ぶために講義 1 コマを使っていたが、説明ビデオの作成により、2014 年度からは講義時間外にビデオで操作方法を学ばせる方法を取り入れることができるようになった。それにより、浮いた 1 コマを指導に当て、より密度の濃い教育を実施する。ビデオ内で強調しているように、「積を示すアスタリスク(*)の挿入し忘れる」といった単純ミスが減少し、学習がより円滑に進められるようになる。

また、解説ビデオに着想を得て、教材に問題文の読み上げ機能をつけるに至った。これにより、留学生に対する日本語学習を支援し、より深い学習ができる環境へと発展させる予定である。

(8) 学生スタッフの育成

本学の学生を学習コンテンツ作成のアシスタントとして雇用し、高等教育開発センターの事業遂行に必要な補助業務を担当してもらっている。主な業務はグローバルキャンパスに関わる講義ビデオの撮影と編集、Web 配信ページの作成、遠隔テレビ会議システムの操作、データ入力、教育支援機器の操作支援などである。

2013年度は9名の学生に業務を委嘱した。この学生スタッフたちに深く感謝の意を表す。

これらの補助業務を通して撮影や編集の技術を身につけ、大学生活で生かしているとの報告を聞くことはとても喜ばしい。しかし、昨年度までの特別経費プロジェクトの終了とともに活動の幅が主に撮影と編集だけになり、学生スタッフに多様な経験に触れさせることが難しくなってきた。また、各業務も最小限の人員で行うことが当然となり、学生スタッフ間の交流が減少していることも次年度に持ち越す大きな課題である。

(9) メディア・IT 活用における国内の動向 ～研修・会議を通して～

①研修会名：大学教育学会第35回大会 シンポジウム

基調講演「Designing Your Courses for More Significant Learning」(Dr. Dee Fink)

主催：大学教育学会

期日：2013年6月1日(土)～2日(日)

会場：東北大学(宮城県)

本講演では、意義ある学習経験を生み出すための授業設計をテーマに、基盤的アイデアと行動指針となるモデルが紹介された。

基盤的アイデアとは、教育中心のパラダイムから学習者中心のパラダイムへと移行させるべきという教員の前提意識の転換である。学期が終わればすぐに忘れる程度の授業や役に立たない卒業生を量産するのではなく、授業や大学での経験を通して学習者がいかにできるようになるかを念頭に置かねばならない。すなわち、教員の教授の質を高めることに注視するのではなく、学生の学習の質を高めることこそ重要である。

質の高い学習体験には3つの特徴がある。(1) 学生の積極的関与：まず学習の機会があり、学習に関わらせること、(2) 学生の努力が意義ある継続的な学習の創出：水が蒸発するようになってはいけない、(3) 学習による付加価値：社会人になったときに役立つ、文学・芸術を楽しむ、より多くのコミュニケーションを生み出す、卒業したときに+αを付け加えられる、である。

授業には4つの要素で、「科目内容に関する知識」、「授業デザイン」、「学生との意思疎通」、「授業の運営」である。現在の大学教員の多くは教員にあるための訓練を受けていない。しかし、科目内容に関する知識は概ね問題ない。教員の弱みとなるのは、「授業デザイン」と「学生との意思疎通」である。授業デザインがよくなれば、学生と教員はかなり楽になるはずだ。授業設計はさらに3つに分割できる。「学習目標」、「授業と学習活動」、「フィードバックと評価」

であり、これらが互いに連動しないとよい授業はなしえない。フィンク博士はこの概念をワークシートとして提示し、各教員が授業を設計する際のアプローチを容易にしている（表1）。

学習目標を考えるために意義ある学習を分類すると「認知」（基礎知識、応用、統合化）と「新しい認知」（人間の特性、関心を向ける、学び方を学ぶ）が考えられ、これらを自分の授業科目に取り入れるとよいだろう。

表1. 3列表記のワークシート

学習目標	評価活動	学習活動
1. 基礎知識		
2. 応用		
3. 統合		
4. 人間の特性 ・自己について、 ・他者について		
5. 関心を向ける		
6. 学び方を学ぶ		

フィードバックと評価については、明示した学習目標に対して対応するように表1に記入していくとよい。フィードバックとは目指すべき到達目標に至るまでの指針にならなくてはならない。自己評価は特に大切なのに、十分にできていないのはなぜだろうか。教員はより良い自己評価のためにフィードバックしなくてはならない。

学習活動も同様に学習目標に対応させた形で考え、表1に記入する。当然、評

価とも連動することになる。特に活動は学生の能動的学習を促さなくてはならない。能動的学習として行動する・観察するといった体験、自己との対話・他者との対話といった省察的対話を取り入れる。経験・情報とアイデア・省察の3種類が相互に関連しながら能動的学習に導くのである。ケーススタディや対話、日誌など具体的な活動として落とし込む。

これまで記述してきた授業設計に関わる3つの要因である「学習目標」、「授業と学習活動」、「フィードバックと評価」を統合する必要がある。これまでの段階ではやっとならただけである。ここから実際に教室などで運営していくための計画に直さなくてはならない。週間スケジュール、教授戦略、プロジェクトの完了、一連の活動として具体的な行動レベルに落とし込む。フィンク博士が強調していたことのひとつに授業内外で連動した学習活動を設定することである。「キャスルトップ」ダイアグラムという図形を用いて、授業内の学習活動と次の授業までの活動（宿題）、次の授業内での学習活動と次の次の授業までの学習活動（宿題）との連続性を策定するべきだという。

授業に能動的な学習を生み出す効果はノーベル物理学賞受賞者カール・ワイマン博士の研究が代表的である。また、ミズーリ大学ビル・ウィークス博士の研究でも、学生がテキストを読むようになり、基礎知識に関する試験結果も以前より向上した、学生の熱意が劇的に向上した、といった成果がでている。

フィンク博士は最後に「適切な授業設計と適切な教授法により適切な結果が実現される」と本講演をまとめた。

3. FD・授業評価部門

本部門の主な活動は、教務部門会議の要請を受けて、本学の教育改善、教育方法の開発のために全学の教員が3年に一度のFD活動に参加するための事業を企画し実施するとともに、教育改善のための研修会や情報提供を進めている。また、各学期に全学において統一された授業評価アンケートの立案・作成及びアンケート調査結果の集計と分析を実施している。これらの活動が、本学の中期計画・目標において、大学院担当教員および学部担当教員両者を対象としてセンターが取り組むよう定められている実施事項として達成するべく、以下の事業を行った。

【平成25年度の主な取り組み】

FD・授業評価部門の主たる事業は、全学的な教育改善を目的とした講演会やワークショップ等の開催と授業評価である。本年度に実施した主な講演会、ワークショップは以下のとおりである。

- ①特別経費「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」での取り組み報告会
平成25年4月2日（火）ポートフォリオ研究会
- ②すぐに使える教育支援機器の展示会 平成25年4月17日（水）4月24日（水）
- ③学習会「成功事例から学ぶ学生と教員のアクティブ・ラーニング」
平成25年6月19日（水） 大岩 幸太郎 教授（教育福祉科学部）
- ④講演会「アクティブ・ラーニングを促す教育手法～パスファインダーを手掛かりに～」
平成25年9月26日（木） 中島 誠 教授（工学部，学術情報室長）
- ⑤教育支援機器の展示会及び集合説明会「インタラクティブ・ホワイトボード」
平成25年10月15日（火），10月17日（木）
- ⑥学生のメンタルヘルス講演会 平成25年11月8日（金）
「今日の大学生のメンタルヘルスについて－自殺に関する全国調査，九大生のコミュニケーション調査などから－」九州大学キャンパスライフ・健康支援センターセンター長 一宮 厚 教授
- ⑦学生教職員学内合同研修会「きつちよむフォーラム2013」平成25年11月27日（水）
「主体的な学習ができる環境の整備～大分大学図書館を活用した学習の促進～」
- ⑧e-Learning 活用セミナー「教育の質向上のための e-Learning」平成25年12月14日（土）
- ⑨シラバスの書き方ワークショップ 平成26年1月16日（木）
- ⑩学生による授業評価アンケート 前期，後期

【平成25年度の事業内容】

（1）ポートフォリオ研究会

2010年度から3年間の特別経費プロジェクト「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」が2013年3月末をもって終了した。今回のプロジェクトを受けて組織したポートフォ

リオ研究会では、3年間のまとめとして、各メンバーが3年間の取り組みを報告し合い、授業改善や事例紹介について情報を共有した。また、当日に参加できなかったメンバーは報告をビデオ撮影し、ビデオオンデマンドとして情報を共有した。

【報告会の概要】

日 時：2013年4月2日（火）13：00～16：30

場 所：教養教育棟 27号教室（旦野原キャンパス）

【報告者一覧】

- 1 地域情報の可視化の授業における ICT の有効性 永野先生（教育福祉科学部）
- 2 アメリカの小学校教科書を使って英語を学ぶ 合田先生（経済学部）
- 3 経済学部の新しいキャリア教育について 大崎先生（経済学部）
- 4 学生利用者を意識した ICT 一方向的な双方向授業を回避するために 柴田先生（経済学部）
- 5 WebClass の会議室(掲示板)を利用したファイル管理と評価 城戸先生（経済学部）
- 6 WebClass を活用した初年次教育の取り組み 高見先生（経済学部）
- 7 WebClass のポートフォリオシステムを使用した授業の取り組み 西村先生（経済学部）
- 8 JABEE における達成度評価とポートフォリオ 越智先生（工学部）
- 9 eポートフォリオを用いたプログラミング演習の改善 行天先生（工学部）
- 10 私の取り組み IBP クラスでの実践より 下田先生（経済学部）
- 11 教育メディアとコンピュータ 既存の WEB サービスでのポートフォリオ
市原靖先生（教育福祉科学部）
- 12 1年次必修科目基礎演習Ⅱ「田舎で輝き隊！」プログラムにおける実践例
本谷先生（経済学部）
- 13 スキー実習での取り組み 前田先生（工学部）
- 14 スポーツと健康づくりの科学 住田先生（教育福祉科学部）

報告会の様子



(2) すぐに使える教育支援機器の展示会

授業改善につながる具体的な提案，ならびに教育方法の参考に寄与することをめざし，高等教育開発センターが貸し出しを行っている教育支援機器の展示会を実施した。また，本センター専任教員である末本氏所有の高等教育に関連する書籍についても併せて展示した。

概要

日時：平成 25 年 4 月 17 日（水）4 月 24 日（水）

場所：教養教育棟 3 階 共用演習室 3-2（旦野原キャンパス）

展示物

ノートパソコン，クリッカー，iPad，iPod Touch，デジタルカメラ，カラープリンタ
デジタルビデオカメラ，パーティション型ホワイトボード，短焦点プロジェクター
デモ（WebClass，WebClass e ポートフォリオ，大分大学グローバルキャンパス）
大学教育関連の書籍（末本氏所有分 70 冊ほど）

参加者 4 月 17 日 2 名， 4 月 24 日 7 名

(3) 学習会「成功事例から学ぶ学生と教員のアクティブ・ラーニング」

本学における学生の主体的な学修を促すため，他大学でのアクティブ・ラーニングの実践例を学習し，情報共有するとともに，今後のあり方について，教員・組織による働きかけとそれを支える背景を理解するための学習会を実施した。

日時：平成 25 年 6 月 19 日（水）

場所：教養教育棟 13 号教室

医学図書館 1 階視聴覚室（遠隔放送）

題目：「成功事例から学ぶ学生と教員のアクティブ・ラーニング」

講師：大岩 幸太郎 教授（教育福祉科学部）

【概要】

1. 報告

最初に大岩先生から，2013 年 4 月 24 日の大学改革セミナー（内田洋行主催）での講演「アクティブ・ラーニングが生まれる文化と空間」（大森 昭生 氏（共愛学園前橋国際大学））の内容を紹介していただいた。

【謝辞】本勉強会のため，大森 昭生 先生より講演資料を頂戴いたしました。ありがとうございます。ここに感謝の意を表します。

「ちょっと大変だけど，実力がつく大学です」を掲げるとおり，アクティブ・ラーニングを中心とした少人数教育に目を惹かれた。684 クラスのうち 50 名以下の授業が 84%，中でも 1～10 名のクラスが 25%，11～20 名のクラスが 31%と徹底しています。授業 350 科目のうち 75%がアクティブ・ラーニング関連科目であり，講義科目は 25%しかない。

また，地域とともにある姿勢も特徴で，地域企業との連携や商品開発や学外でのプレゼン，繭美蚕（まゆみさん）という学生企業など活躍の場が充実していることの紹介があった。

2. 検討会

後半は参加者 8 名で授業改善に向けてのアクティブ・ラーニングについて議論をした。

実質的な学生の学びにつなげるための「アクティブ・ラーニング」について共愛学園前橋国際大学の事例を学ぶとともに、長崎大学・三重大学・早稲田大学など参加者が知っていた話題を共有し、理解を深めるとともに、今後の FD 活動や教職協働に向けて、小さなアイデアを見いだすことのできる話し合いであった。具体的な活動プランにつなげるには、対応すべき教育課題の特定やニーズ調査が欠かせないものの、相談を受けたときに対応できる準備がセンターには必要であることが感じられた学習会であった。

(4) 講演会「アクティブ・ラーニングを促す教育手法～パスファインダーを手掛かりに～」

学生の主体的な学修を促すための一手法として図書館の効果的な利用は重要である。その際の強力なツールとしてパスファインダーが注目されている。パスファインダーとは、学生が特定のテーマについて学習する際に、手始めとなる基本資料の一部や、図書館における調べ方を紹介して、アクティブ・ラーニング（主体的学習）を促進するための手引きである。

この勉強会では、多くの大学で作成されているパスファインダーの特徴や導入の意義だけでなく、その作成方法も紹介して理解を深めることを目的とした。

題 目：アクティブ・ラーニングを促す教育手法～パスファインダーを手掛かりに～

日 時：平成 25 年 9 月 26 日（木）

場 所：図書館 科目別学習支援ブースエリア（且野原キャンパス）

講 師：中島 誠 教授（工学部，学術情報室長）

共 催：学術情報拠点（図書館）

【概 要】

工学部教授（学術情報室長）中島 誠氏より、パスファインダーの定義、意義、導入することによる教育的効果について説明された。

パスファインダーは単なる検索ツールではなく、初学者である学生の学習を方向付けることで、問題解決能力、メディア活用能力、課題探究心の向上を図ることができ、能動的な学習を促進する手段として期待ができること等について、他大学の事例が大分大学のシステムとともに説明があった。

講演後の議論では、普及のための課題や、今後の教養教育のあり方、学習形態を変革させるツールであること等にも話題が及んだ。



(5) 教育支援機器の展示会及び集合説明会「インタラクティブ・ホワイトボード」

今回の展示会は、双方向性機能を強化した電子ホワイトボードの紹介を通して、遠隔地間では難しかった協同学習やアクティブ・ラーニングの機能性を検討する目的で開催した。

日 時：平成 25 年 10 月 15 日（火）、10 月 16 日（水）

場 所：学術情報拠点（図書館）科目別支援スペース（旦野原キャンパス）

【概要】

2 日間にわたって、リコージャパンのスタッフに、最新の電子ホワイトボードを展示し、説明をしていただいた。この機種は特に書き心地がよいということで、実際に参加者にペンを持って、書く感覚や反応速度を体験してもらった。

注目の「遠隔地との協同作業」については、現在の仕様は同ネットワーク限定ということので実演には至らなかったが、その代わりにビデオを見せてもらうなどイメージをつかむことができた。

教職員の他、教育福祉科学部の学生の参加もあり、教育現場での電子黒板を使った授業についての関心の高さと準備の必要性を感じることができた。教員からは自らが使うことを想定した質問が活発に行われ、（説明に書いた記録は残せるのか、どのようなファイル形式が使えるのか、何人が同時に書けるのか、テレビ会議システムでどのように出力するのか等）高大連携などでの利用やゼミにおける有用性を実感した様子であった。

今後の商品開発にも役立つ意見交換ができたとのことで、双方にとって有意義な時間が過ぎることができた。

[参加者]・経済学部…3名・教育福祉科学部…2名・産学官連携推進機構…1名
・高等教育開発センター…3名・学生…3名

(6) 学生のメンタルヘルス講演会

学生の健全な学生生活を支援するためには、本学の教職員が学生の変調を早期にとらえ適切に対応することが重要であるとの観点から、本学の保健管理センターとの共催で、毎年、大学の保健管理センター長等の大学生のメンタルヘルスに造詣の深い第一人者を招き講演会を実施している。本年度は九州大学キャンパスライフ・健康支援センター長である一宮敦教授をお招きし、講演会を開催した。

日 時：平成 25 年 11 月 8 日（金）

場 所：教養教育棟 35 号教室（旦野原キャンパス）

第一会議室（挾間キャンパス、遠隔配信）

題 目：「今日の大学生のメンタルヘルスについて

－自殺に関する全国調査、九大生のコミュニケーション調査などから－

講 師：九州大学キャンパスライフ・健康支援センターセンター長 一宮 厚 教授

共 催：学生支援部、メンタルヘルス専門委員会、保健管理センター、高等教育開発センター

【概要】

水野支援課課長より開会の辞、中川高等教育センター次長による挨拶、保健管理センター長

藤田先生からの講師紹介ののち、一宮先生の講演が始まった。

講師の一宮先生が大分出身であること、九州大学では教員の所属と機能を分けていることの紹介があった。その中で、基幹教育院は1年生をみっちり教育しようとの方針の下、教育とメンタルヘルスの両面から学生を支援する組織ができているとの説明があった。

講演の概要は以下のとおりである。

- ・大学の精神保健は、学生は学校保健安全法（文科省）、職員は労働安全衛生法（厚労省）による規制を受ける。法人化後、労働安全衛生法の縛りがきつくなった。
- ・直面する問題は、留学生の増大、就職支援の必要性の増大、大学のネームバリュー低下、障がい者支援の法制化（発達障害を含めた支援）、コミュニケーションの不得手な学生の増大、身体支援として生活習慣病の予防指導、禁煙推進
- ・大学の抱えるメンタルヘルスの問題で、最悪の結末は学生の自殺である。現在の我が国の自殺者数は戦後最大で、景気の下降にしたがって近年増えている。2万人いれば2、3人自殺者が出る（九大）。大分大学は出るか出ないかくらいの学生数であろう。九大は昨年度8人で過去最大である。
- ・WHOによる精神疾患のデータが紹介された。精神疾患の発生により、精神的変調、行動上（言動上）の変化、社会的機能の低下、日常生活活動の低下があり、最終的には生命の危機に及ぶ。対策にはより早期の対応が効果的である。ただし、思春期・青年期の特徴は極端さ、非定型的であり分かりにくい。
- ・精神障害の分類「ICD-10 WHOの診断基準」より、ストレス関連障害が予防できるもの
- ・背景は、ストレス状況（学力の問題、学習意欲の低下、人間関係、経済的困難、睡眠不足、過労、人間関係をよくしなければならないという強迫観念）。
- ・修学上のサインに不登校（ひきこもり）があるが、大学生は分かりにくく、教養部がなくなると学生の管理がさらに難しい。九大では20人体制を作ろうとしているが、それに適合できない学生もいる（成績不良、留年、休学、退学、自殺、自傷）。
- ・自殺問題検討ワーキンググループによる調査（国立大学への質問紙調査の結果）から、特徴的なものは、自殺が増えているかどうかについて明確なデータが示されていないが、データがある大学では30%が増加と答えている。自殺者のデータ管理は80%が事務で、保健管理施設では15%程度である。
- ・自殺リスクの高い学生への対策として、修学に問題のある学生への面接と指導、不登校ないしは頻繁な欠席がある学生への呼び出し面接と指導、就職活動に問題を抱える学生への面接と指導、学内に人間関係を築くのが難しい学生への面接と指導などがあるが、呼び出しをかけたとたんに自殺した例もある。一方、初年次教育でグループワークなどの人間関係づくりを取り入れる授業を多く行っている。
- ・九大では1996年以降入学者に対して質問紙による調査を実施しており、対人関係恐怖を感じる学生、対人緊張が強くて困ると答える学生は平成8年頃から増加している。友人作りがうまくいかずいつも孤独であるという学生を対象に、5月に新生面接をしている。しかし、面接に来てほとんど喋れない学生が来る、カウンセリングが進展しない、結果的に中退してしまう。
- ・2001年から2004年の間に入学生に変化が起こっており、特に2006年に入学した学生では、

大学での学力低下が起こっている。ゆとり教育第 2 世代が、対人恐怖で飛躍的に増加。

・1 年次（2001 年との 2008 年度）に有意差があるが、4 年次、すなわち大学にいる 3 年間に、恐怖感が少し軽くなっている。

質疑応答では、以下の話題についてやりとりがあった。

- ・ゆとり教育で学校が指導から支援に変わったことによる影響。
- ・学生には発表の機会が増えていることが実は恐怖感になっているのではないか。
- ・学生間で横並びの思想が徹底している。
- ・ネットとケータイの普及による非対面のコミュニケーション方法が増えた。

（7）学生教職員学内合同研修会「きっちよむフォーラム 2013」

本学での教育改善のために全学の学生と教職員が一堂に会する研修会として、平成 17 年度より毎年実施している FD ワークショップである。本研修会の特徴として、教員のみによる研修会ではなく、学生と教職員が授業改善という目的のもとにそれぞれの立場から意見を出し合い検討を重ねることで、より良い具体的な解決策を探ることを目的としている。

本年度は、新装された図書館（学術情報拠点）とともに、学生の主体的な学修を促すためにはどうすればよいのかを本フォーラムのテーマとして取り上げた。具体的には、調べ学習を取り入れた授業に焦点を当て、学生からは重要な学習環境である図書館への要望を、図書館からは新機能や現在の利用状況に加えて、「静かに本を読むだけではない」新しい時代の図書館における学修支援の取り組みを報告するとともに、参加者の意見により議論を深めた。

題 目：学生の主体的な学修を促進する ―“新時代”を迎えた図書館とともに―

日 時：平成 25 年 11 月 27 日（水）13 時 10 分～14 時 40 分（3 限）

場 所：図書館ラーニング・コモンズ（旦野原キャンパス）

医学図書館 2 階多目的室（挾間キャンパス，遠隔配信）

【概 要】

1. 学生による調べ学習の成果

教養科目「成人教育方法入門」受講生による報告として、図書館を有効に活用し、自らの課題解決学習を進めるために図書館への提言を行った。きっちよむフォーラムに先立つ 2 回の授業でのグループワークで、課題を抽出するとともにその解決策を考え、そのまとめを 2 名の学生が代表として報告した。

2. 図書館の活用

続いて、図書館職員から、上記の学生からの報告を受ける形で「新装された図書館の機能と利用法」「大学図書館を利用する学生の実態」「図書館での新しい学修支援」の 3 件の報告があった。

3. 全体討論（ワークショップ）

学生からの報告と、図書館からの報告をもとに、グループワークで話し合いをした。フォーラムに参加した教職員も学生のテーブルに加わり、「学生の学修を深めるためにできることは何か」を中心課題としてお互いの意見を交換した。

参加者

所属	氏名
教育福祉科学部	山下茂
経済学部	宮町良宏, 佐藤隆, 市原宏一
工学部	工藤孝人, 上見憲弘, 原恭彦, 秋田昌憲, 中島誠
その他	菅沼勝彦 (国際教育研究センター), 佐藤浩彰, 立花志保 (図書館) 学生支援課, 図書館

学生の参加者 34名

<学生からのコメント>

- ・自分たちが図書館を十分に活用できていないことが分かった。図書館からの報告はもっと多くの学生に同じ事をするべきであると思った。今回新たに思いついたのは、図書館からの利用者へのアプローチ（利用方法の説明）が少ないということ。これをするだけでも利用者は増えると思う。
- ・知らなかった図書館のことを知ることができてよかった。
- ・成人教育方法を受講してから本日の「きっちよむフォーラム」に参加して、図書館の様々な取り組みを知ることができた。学生代表の発表も素晴らしく主体的に考えることができた。
- ・図書館のサービスについて知らないことが多かった。いろいろ利用方法があるので活用したいです。
- ・大学内で取り組まれているレファレンスサービス、コンシェルジュ等をもっと広報して、なじみのあるものになれば、もっと利用者のニーズに応えることができるのではないかと思った。
- ・レファレンスサービスやコンシェルジュは非常によい取り組みだが、自分も今日初めてその存在を知ったので、他のサービスも含め、もっと図書館のサービスを宣伝していくべきだと思った。
- ・教授や先生などと一緒に作業するというのは新鮮だった。
- ・今回のフォーラムで図書館の知らなかった機能や情報について知ることができた。このような取り組みはもっと行うべきだと感じた。
- ・多くの先生や学生とディスカッションする機械ははじめてだったので、新鮮でいい経験になった。
- ・すごく貴重な経験だった。まだまだ知られていない図書館のことがあり、その部分を利用していくことが大事だと感じた。
- ・図書館のことについて知らないことが多く、自分自身まだまだ活用しきれていないと感じました。
- ・学生が図書館の取り組みについてよく知らないことが分かった。もっと取り組みの宣伝活動をしたら良いと思った。
- ・今回の話し合いで自分たちがただ知らないだけだったので、もっと良く図書館のことを知るともっと、良く図書館を利用できると思いました。それを友人などに話すと利用者も増えていくと思いました。
- ・班にいらした先生が一言も発言なさらず、ディスカッションにも参加されずで何となく残念でした。図書館からの発表は、図書館のことをよく知る良い機会でした。

- ・図書館は色々と工夫しているんだなと感じましたが、そのサービスの存在自体を知らないのはもったいないと感じました。
- ・きっちよむフォーラムを受けて始めてコンシェルジュなどの制度を知り、また他大学から本の取り寄せができること知り、より図書館を利用しようと思った。
- ・今回の「きっちよむフォーラム」では、現在の大学の図書館についての現状を知れたし、レファレンスサービスといった初めて知ったサービスもあったので、まだまだ自分たちの認識が甘いなと感じました。しかし、図書館側もそういったサービスの実態を知らせる工夫をして欲しいなと思いました。それをすることで、もっと利用者が増え、活性化につながると意見としてまとまりました。
- ・時間がおして議論があまりできなかったのは惜しかったが、有益なグループワークができてよかった。
- ・自分の意見をしっかり出せたと思う。
- ・自分自身、図書館について知らないことが多く、また、多くの学生も自分と同じように知らないことがあると思うので、図書館について知る機会があれば利用者は増えると思った。
- ・プレゼンしか見ていないというか、時間がなさ過ぎたなと思いました。短い時間で積極的に話せたなと思いました。あと、プレゼンで思いついたことは、下手くそなプレゼンだなと思ったことです。ただパワーポイントで読むだけなら小学生でもできますし、聞く側もつまらないのもっと発表の工夫（今回は準備する時間が短いということもありますが）も必要かなと思いました。
- ・今回のきっちよむフォーラムで図書館の取り組みについて新たに知ることがたくさんあった。コンシェルジュとかパスファインダーとか知らなかったけど、すごくいいと思った。
- ・本日図書館には未だ知らない便利な機能があるということを知ることができてよかったです。
- ・教育の先生方の視点が、学生と違ってたのしかった。あらためて人に伝えるのが難しいと思った。
- ・今まで知らなかった図書館のサービスを新たに知ることができて図書館の利用の幅が広がったと思う。この情報をもとに、図書館を有意義に活用していきたいと感じた。3, 4年生になると研究なども始まるので、この知識を広めて図書館利用者を増やしていきたい。
- ・今まで、図書館のことをあまり知らなかったです。これから利用する機会が増えそうです。今日のディスカッションでは、僕たちの班は新しい企画を提案しました。「図書館ナンバーズ」。こういう発表が出来るもの面白いし、良い経験になりました。
- ・理解が深まる十分な時間が確保できなかった。
- ・今回の話し合いの時間が短かったですが、先生の見地で図書館の最終目的が何なのかという意見が印象に残りました。解決はしていませんが、学生目線だけで考えた私たちにとって印象深い意見だったと思います。
- ・私たち学生が知らないコンシェルジュなどのサービスが図書館にはあって、このようなサービスを知る機会がもっとあったらいいなと思いました。学生だけの単次元的な意見に固執しない、多次元的な考えを聞くことができてよかったです。ディスカッションの時間が短く、意見を言えなかったのですが、図書館の情報発信の方法として、Facebook に加えて、Twitter での企画の告知や施設の紹介などを行ってみてはどうだろうか、と考えました。生徒は Facebook よ

りも Twitter をよりこまめにチェックしているように感じるので、検討をお願いします。

・図書館側に、コンシェルジュなどの素晴らしいシステムがあることを知りました。これからは、図書館の更なる広報活動とともに、私たち学生自身が、よりそのシステムを広めていきたいと思います。図書館が学習の基盤となるように。

（８）e-Learning 活用セミナー「教育の質向上のための e-Learning」

現在多くの大学では教育・学修の質を保証するため、あるいは、教育する側や学生個人においてそれぞれの学習成果を評価するにあたって、ポートフォリオを取り込むなど、様々な学習支援システムの活用を始めており、教学の分野にとって重要なものとなってきている。そこで、先進的にとりくんでいる大学の事例紹介とともに、本学での事例もふまえ、本学での学習支援システムのあり方を検討するためのセミナーを開催した。

日 時：2013年12月14日（土）13：00～17：00

場 所：且野原キャンパス：教育福祉科学部300号教室

【概 要】

第1部 教学におけるポートフォリオの先進的取組

- ・佐賀大学ポートフォリオ学習支援統合システムとチューター制度に基づく学習支援
ー ラーニング・ポートフォリオを中心に ー 皆本 晃弥 氏（佐賀大学）
- ・学修自己評価のためのeポートフォリオシステムの開発と運用
林 朗弘 氏（九州工業大学）

第2部 eポートフォリオの活用事例およびシステムの拡張

- ・eポートフォリオを用いたプログラミング演習の改善 行天 啓二 氏（大分大学）
- ・プレゼンテーション能力を育成するためのeポートフォリオの活用
山住 富也 氏（名古屋文理大学）
- ・WebClass 統合eポートフォリオへの取り組み
平 治彦 氏（日本データパシフィック株式会社）

第3部 教育の質保証とeポートフォリオ

- ・eポートフォリオを活用した学習評価と教育の質保証の在り方
森本 康彦 氏（東京学芸大学）

討論（質疑応答）

なお、本セミナーに先立って、関連イベントとして「WebClass 体験セミナー」「WebClass ユーザー相談会」を実施した。

本学からの参加者（※学外からは29名の参加があった）

所 属	氏名
教育福祉科学部	藤井 弘也, 山下 茂
経済学部	市原 宏一, 城戸 照子
工学部	行天 啓二, 田中 康彦
その他	古城 和敬 (理事) 末本 哲雄, 中川 忠宣, 牧野 治敏 (高等教育開発センター)

(9) シラバス作成のための講習会

本学での学部のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーが定まり、それを実現し、大学教育の質を保証するための授業の位置づけが明確になり、その裏付けとしてのシラバスが一生重要なものとなっている。また、本学の授業評価アンケートでは、シラバスに関する項目が一般的に低い評価がされる傾向が続いている。これらの課題への対応の一つとして、シラバスの作り方についてのワークショップを開催した。

日 時：2014年1月16日（木）14：50～16：20

場 所：教養教育棟 27号教室（旦野原キャンパス）

担 当：末本 哲雄 氏（高等教育開発センター）

【概 要】

全学に配布された「大分大学版シラバスの書き方」を題材とし、シラバスの役割を再認識し、執筆前の考え方と支援ツールを提供した。

1月に赴任し、これから初めて大分大学のシラバスを書く予定の教員、新しい科目を立ち上げるので、シラバスを書く際のヒントを得たい教員の参加があった。

既に配布している「大分大学版シラバスの書き方」では書ききれなかった授業デザインについて、「ねらいの重要性」、「到達目標を考える際のヒントと用いるとよい動詞」、「評価方法と到達目標の整合性チェック」を強制的に扱い、最後に末本氏が所有する協同学習関連の書籍を紹介した。

[参加者]

教育福祉科学部・・・1名、経済学部・・・1名、高等教育開発センター・・・1名

(10) ひるFD

本センターでは毎年数回の研修会や講演会等を開催しているが、参加状況は思わしくない状態が続いている。センターに寄せられる意見としては、開催日程が授業や他の行事と重なり参加ができない、関心のあるテーマでは無い、などが届けられている。そこで、本年度より、少しでも多くの教職員が参加できるようにと、ほぼ毎週の昼休みの時間帯で短時間のFDを開催することとし、講師は本センターの末本哲雄氏が担当した。各回の参加者は数名であるが、本年度を通しての参加者数は57名であった。

日程とテーマを以下に記した。

7月4日 今日の授業、どげえやったかな！？～WebClassを使った、簡単な問題の作成～

7月11日 今さら聞けないテクニック？！

～パワーポイント、ワードでの、困りごと教えて！もっとうまい手はないの？～

7月18日 Excel関数を使って、集計の手間を減らす方法～条件にあったセル数を数える、自動でセルの色を変えるとか～

7月25日 人の授業デザインを見よう

～『科学技術コミュニケーション入門』の授業設計～

- 8月1日 講演「意義ある学習を目指す授業設計」(ディー・フィンク博士)を紹介する
～大学教育学会第35回大会の出張報告～
- 8月9日 担当科目をチェックシートで振り返る ～普段やらないことを取ってやる30分～
- 8月22日 WebClass e ポートフォリオ・コンテナを使った授業スタイルの提案
～個人もしくはグループの活動に相互評価を取り入れる～
- 8月29日 講義形式の授業をより効果的にする視点と方法
～ E. F. レディッシュ著「科学をどう教えるか アメリカにおける新しい物理教育の実践」(丸善出版)の「第7章 講義を基本とする方法」から得る示唆～
- 9月4日 後期に向けたWebClassの利用準備 ～コースの作成から3つの基本機能まで～
- 9月11日 全国大学教育研究センター等協議会 出張報告
～山口大学のカリキュラム改革に関する講演を紹介する～
- 9月19日 クリッカーの操作練習会 ～TurningPointを使って質問スライドを作る～
- 9月25日 授業コンサルテーションの説明会
- 10月3日 協同学習を促す51の工夫と後期の実践に向けた意見交換
～「協同学習入門」杉江修治(ナカニシヤ出版)をヒントに～
- 10月9日 たかが授業アンケート、されど授業アンケート
～講演「授業アンケートの見直しと効果的活用方法」
(佐藤浩章:愛媛大学)を紹介する～
- 10月23日 好きな日本語文を機械に読ませ、教育や施設整備に利用する
～音声合成ソフト「ボイスソムリエ ネオ」を使った教材作成体験～
- 10月30日 岩手大学「『匠の技』伝承プロジェクト」の紹介
～優れた教授技術を共有する取り組みにあやかる～
- 11月6日 教学マネジメントの基本
～大学戦略経営論(東信堂, 2010)第3章第3節「教学経営の確立」を読む～
- 11月13日 学生の創発と教師の想定外 ～「日本の『学び』と大学教育」(ナカニシヤ出版, 2013)第5章「主体的な学び」はポートフォリオで評価できるか」を読む～
- 11月20日 クリッカーの回答と個人を関連づける方法
- 11月28日 家島明彦先生(島根大学)のTurningPoint利用事例の紹介
～「クリッカーを活用したアクティブ・ラーニング研究会」出張報告～
- 12月4日 「アクティブ・ラーニングを通じての学生の学びとそれを支える環境」を紹介する
～「大学教育学会2013年度課題研究集会」出張報告～
- 12月11日 岩手大学「『匠の技』伝承プロジェクト」の紹介[2]
～優れた教授技術を共有する取り組みにあやかる～
- 1月29日 第15回目のまとめに使える授業技法
～ホワイトボードにマインドマップを描かせる～
- 2月26日 コピペ判定支援ソフト「コピペルナーV3」のデモ

(11) 学生による授業改善のためのアンケート調査

本学の授業改善を目的とした、学生による授業評価の実施母体である教務部門会議の活動を支援するために、全学統一した授業評価アンケートの立案、作成及び調査結果の集計と分析を行い、報告書を発行している。本年度刊行した報告書は「平成 24 年度教員による自己点検レポート集～学生による授業評価への対応～」 「平成 24 年度授業改善のためのアンケート調査結果報告書～学生による授業評価～」である。平成 25 年前学期及び後学期に実施した「学生による授業評価」アンケート調査の調査対象は以下のとおりである。

前学期

- ・ 教養教育（全学教育機構）：身体スポーツ科目・医学部基礎教育科目
- ・ 教育福祉科学部：A グループ(授業担当者の名前あ～こ)
- ・ 経済学部：各学科最初の講座の科目，学科共通科目
- ・ 医学部：医学部からの提出科目
- ・ 工学部：全科目

後学期

- ・ 教養教育（全学教育機構）：主題科目(人文分野)
- ・ 教育福祉科学部：B グループ(授業担当者の名前さ～の)
- ・ 経済学部：各学科 2 番目の講座の科目
- ・ 医学部：医学部提出科目
- ・ 工学部：全科目

①平成 25 年度前期授業改善のためのアンケート提出科目

【教養教育】	物理学実験	(谷川雅人)
倫理学 (西 英久)	生物学実験	(長谷川英男・池田八果穂)
医学のための倫理学 (西 英久)	物理学Ⅲ	(谷川雅人・矢野博之)
化学Ⅴ (久保田直治・佐々木隆子)	生物学Ⅰ	(長谷川英男)
生物学 (長谷川英男・池田八果穂)	日本語コミュニケーション学	(吉岡泰夫)
情報科学 (江島伸興)	化学Ⅱ	(久保田直治)
医療・健康心理学 (上野徳美)	物理学Ⅰ	(谷川雅人)
物理学実験 (谷川雅人)	生物学Ⅴ	(長谷川英男・吉岡秀克)
生物学実験 (長谷川英男・池田八果穂)	健康科学概論	(北野敬明)
医療情報システム学 (江島伸興・大山哲司)	数学Ⅲ	(大山哲司)
生物学Ⅱ (池田八果穂)	健康運動科学	(稲垣 敦)
医療情報学Ⅱ (江島伸興)	健康運動科学	(稲垣 敦)
医学のための心理学Ⅰ (上野徳美)	スポーツと健康づくりの科学	(住田 実)
化学 (久保田直治・下田恵)	レクリエーションスポーツの科学	(谷口 勇一)
化学Ⅰ (下田恵)		
数学Ⅰ (大山哲司)	春・夏の野外活動	(前田 寛)

サッカーと運動生理 (石橋 健司)
イギリスで生まれたスポーツ (島田 義生)
生涯スポーツの足がかり I (島田 義生)
バレーボールの科学 (岡内 優明)
レクリエーションスポーツと健康
(松元 義人)

【教育福祉科学部】

授業研究 (伊藤 安浩)
教育実践の基礎 (伊藤 安浩)
ソーシャルワーク概説 II (衣笠 一茂)
ソーシャルワーク論 IV (衣笠 一茂)
精神保健福祉援助技術各論 II (衣笠 一茂)
ソーシャルワーク演習 I (衣笠 一茂)
英詩研究 (稲用 茂夫)
イギリスの言語と文化 (稲用 茂夫)
知的障害児の心理・生理・病理 (衛藤 裕司)
学習障害(LD)児等の心理と指導法 (衛藤 裕司)
障害児教育総論 (衛藤 裕司)
特殊教育論 (衛藤 裕司)
数学概論 (小) (沖野 隆久)
国語史 (荻野 千砂子)
国語 (小) (荻野 千砂子)
国文法研究 (荻野 千砂子)
幾何学 I (家本 宣幸)
心理学 (河野 伸子)
地域福祉論 I (垣田 裕介)
言語・外国語 (中) Ia (甘利 弘樹)
言語・外国語 (中) III (甘利 弘樹)
世界史概説 II (甘利 弘樹)
東洋史概説 (甘利 弘樹)
アートマネジメント I (久間 清喜)
表現基礎演習 II (久間 清喜)
絵画 II B (a) (久間 清喜)
芸術表現応用 AI (絵画) (久間 清喜)
芸術表現展開法 (久間 清喜)
絵画 III B (a) (久間 清喜)
アメリカ文学 (金子 光茂)
アメリカ文学演習 (翻訳) (金子 光茂)

社会福祉概説 (隅田 好美)
ソーシャルワーク論 II (隅田 好美)
表現基礎実習 BI (声楽) a (栗栖 由美子)
表現基礎実習 BI (声楽) c (栗栖 由美子)
音楽 (小) (栗栖 由美子)
声楽 I (栗栖 由美子)
歌唱指導演習 (栗栖 由美子)
芸術表現応用 BI (声楽) b (栗栖 由美子)
合唱 I (栗栖 由美子)
コーラス Ia (栗栖 由美子)
合唱 III (栗栖 由美子)
コーラス II a (栗栖 由美子)
合唱 V (栗栖 由美子)
合唱 VII (栗栖 由美子)
表現構成演習 II a (栗栖 由美子)
肢体不自由児の教育と指導法 (古賀 精治)
重複障害教育総論 (古賀 精治)
知的障害児教育演習 (古賀 精治)
教育心理学研究法 I (古城 和敬)
心理学研究法 (古城 和敬)
社会心理学 (古城 和敬)
教育心理学 (古城 和敬)
心理教育統計法 (古城 和敬)
高齢者福祉論 I (工藤 修一)
思想史概論 II (黒川 勲)
哲学演習 (黒川 勲)
哲学概論 II (黒川 勲)
比較思想論 II (黒川 勲)
倫理学 (黒川 勲)
倫理学概論 (黒川 勲)
木材加工学 I (製図及び実習を含む。)
(市原 靖士)
教育情報処理演習 (市原 靖士)
工業科指導法 (高) (市原 靖士)
教育情報処理演習 (市原 靖士)
技術科教育演習 (市原 靖士)
技術科教育演習 I (市原 靖士)
教育メディアとコンピュータ (市原 靖士)
木材加工実習 I (市原 靖士)

変動地形論 (小山 拓志)
 地理学概論 (地誌を含む。) (小山 拓志)
 地形環境論 (小山 拓志)
 西洋文明論 I (青柳 かおり)
 人体解剖学 (石橋 健司)
 生涯スポーツ演習 (石橋 健司)
 サッカー (石橋 健司)
 運動生理学 (石橋 健司)
 生理学 (運動生理学を含む。) (石橋 健司)
 住居学 I (製図を含む。) (川田 菜穂子)
 住生活論 (製図を含む) (川田 菜穂子)
 住居計画学 (川田 菜穂子)
 住環境論 (川田 菜穂子)
 住居学 II (川田 菜穂子)
 教育数学 I (川寄 道広)
 算数科指導法 (小) (川寄 道広)
 算数科授業論 (川寄 道広)
 生物学実験 I (コンピュータ活用を含む。)
 (泉 好弘)
 応用理科 III (泉 好弘)
 理科 (小) (泉 好弘)
 理科実験 III (泉 好弘)
 プログラミング言語演習 II (大岩 幸太郎)
 デジタル情報演習 (大岩 幸太郎)
 情報システム I (大岩 幸太郎)
 情報科学のための英語 (大隈 ひとみ)
 データ分析と統計 (大隈 ひとみ)
 知能情報処理 (大隈 ひとみ)
 情報数学 (大隈 ひとみ)
 コンピュータ (大隈 ひとみ)
 地球化学 (大上 和敏)
 環境科学概論 (大上 和敏)
 基礎環境化学実験 I (大上 和敏)
 環境化学概論 (大上 和敏)
 現代社会論 I (大杉 至)
 社会学概論 I (大杉 至)
 社会学 (大杉 至)
 言語・外国語 (仏) Ib (大嶋 誠)
 解析学 III (大野 貴雄)

解析学 I (大野 貴雄)
 基礎解析演習 I (大野 貴雄)
 言語・外国語 (独) Ia (池内 宣夫)
 西洋言語論 (池内 宣夫)
 教師学 (麻生 良太)
 現代芸術事情 (麻生 和江)
 体育(小) (麻生 和江)
 ダンス (麻生 和江)
 ダンス創作活動 (麻生 和江)
 身体表現基礎 (麻生 和江)
 舞踊創作実習 I (麻生 和江)
 舞踊創作実習 II (麻生 和江)
 舞踊創作実習 III (麻生 和江)
 体操・器械運動 (麻生 和江)
 身体感覚の知覚演習 (麻生 和江)

【経済学部】
 ビジネス英語 B
 (ホワイト クリストファー ミル)
 マクロ経済学 I (宇野 真人)
 簿記 I (越智 学)
 計量経済学 (下田 憲雄)
 経済学 II (下田 憲雄)
 社会思想史 I (嘉目 克彦)
 地域福祉論 II (垣田 裕介)
 経済学 III (丸山 武志)
 現代資本主義論 II (丸山 武志)
 経営学 I (宮下 清)
 地域発展論 I (宮町 良広)
 都市経営論 I (高島 拓哉)
 政治経済学 I (佐藤 隆)
 農村発展論 I (山浦 陽一)
 マクロ経済学セミナー (小野 宏)
 経営情報論 I (松岡 輝美)
 マーケティング論 I (松隈 久昭)
 比較経営史 I (松尾 純廣)
 比較地域分析 I (城戸 照子)
 経済数学 I (西村 善博)
 ミクロ経済学 I (村山 悠)

地域と交通	(大井 尚司)	基礎理論化学 I	(大賀 恭)
簿記 I	(中村 美保)	電気化学	(津村 朋樹)
基礎経営論 I	(藤原 直樹)	セラミックス化学	(豊田 昌宏)
経営学入門	(片山 准一)	流体工学 I	(栗原 央流)
株式会社論 I	(片山 准一)	材料と弾性の力学	(後藤 真宏)
企業組織法 I	(牧 真理子)	伝熱学 I	(田上 公俊)
組織革新論 I	(本谷 るり)	機械力学基礎・演習	(劉 孝宏)
タイの経済と課題	(木村 雄一)	構造力学 II	(井上 正文)
経済学 I	(高見 博之)	材料力学	(佐藤 嘉昭)
		基礎構造	(佐藤 嘉昭)
		都市計画	(佐藤 誠治)
【医学部】		建築計画設計演習 II	(佐藤 誠治)
精神・神経疾病論	(井上 亮)	建築CAD製図 II	(佐藤 誠治)
精神看護方法論 II	(河村 奈美子)	建築設備計画 I	(真鍋 正規)
健康運動科学	(島田 義生)	建築材料	(大谷 俊浩)
医療・看護情報論	(末弘 理恵)	建築施工学	(大谷 俊浩)
成人周手術期看護方法論	(末弘 理恵)	建築総論	(大鶴 徹)
保健政策論	(杉田 聡)	建築環境計画 I	(大鶴 徹)
健康運動科学演習 I	(吉村 良孝)	コンピュータプログラミング	(富来 礼次)
健康運動科学演習 I	(吉村 良孝)	建築法規	(鈴木 義弘)
		福祉環境計画	(鈴木 義弘)
【工学部】		建築計画 I	(鈴木 義弘)
伝熱学 I	(岩本 光生)	建築英語	(鈴木 義弘)
機械要素設計学	(岩本 光生)	情報論理学	(古家 賢一)
機械設計製図 II	(岩本 光生)	代数学 II	(高阪 史明)
機械設計製図 I	(岩本 光生)	数値解析 II	(高阪 史明)
エネルギー変換機器	(後藤 雄治)	基礎数学	(高阪 史明)
エネルギーシステムデザイン	(後藤 雄治)	解析学 II	(高阪 史明)
電気回路 II	(高坂 拓司)	情報ネットワーク	(西野 浩明)
流体工学 I	(山田 英巳)	計算機アーキテクチャ I	(川口 剛)
流れ学 I	(山田 英巳)	言語処理	(川口 剛)
材料力学 I	(小田 和広)	プログラミング言語処理系	(川口 剛)
弾性力学	(小田 和広)	英語コミュニケーション	(大城 英裕)
電気理論基礎	(濱本 誠)	ソフトウェア工学 II	(大竹 哲史)
電磁気学 I	(濱本 誠)	情報構造論	(中島 誠)
プラズマ工学	(濱本 誠)	代数学 II	(田中 康彦)
分析化学	(井上 高教)	代数学 I	(田中 康彦)
高分子化学 II	(氏家 誠司)	基礎数学	(田中 康彦)
高分子化学 I	(守山 雅也)	情報システム概論	(二村 祥一)
有機化学 II	(石川 雄一)		

基礎プログラミング (二村 祥一)	福祉機器工学Ⅰ (今戸 啓二)
データベースシステム (二村 祥一)	機構力学 (今戸 啓二)
代数学Ⅱ (末竹 千博)	電気回路Ⅱ (小川 幸吉)
解析学Ⅰ (末竹 千博)	電気工学Ⅰ (小川 幸吉)
基礎数学 (末竹 千博)	メカトロニクスⅡ (小川 幸吉)
知識処理論 (末田 直道)	現代制御工学 (松尾 孝美)
電気電子計測工学 (榎園 正人)	情報処理概論 (松尾 孝美)
電気電子工学入門 (金澤 誠司)	人間システム信号処理 (上見 憲弘)
電気回路Ⅰ (金澤 誠司)	人間システム工学 (上見 憲弘)
電気回路Ⅲ (戸高 孝)	人間工学 (前田 寛)
電気機器工学Ⅱ (戸高 孝)	Cプログラミング (池内 秀隆)
電気電子数学Ⅰ (柴田 克成)	応用解析Ⅱ (福田 亮治)
電気工学概論Ⅰ (柴田 克成)	応用解析Ⅲ (福田 亮治)
通信工学 (秋田 昌憲)	応用解析Ⅱ (福田 亮治)
音響工学 (秋田 昌憲)	原子と分子 (大賀 恭)
電磁気学Ⅰ (大久保 利一)	材料力学基礎・演習 (後藤 真宏)
電気機器設計・製図 (槌田 雄二)	プログラム言語演習 (石松 克也)
計算機工学Ⅰ (緑川 洋一)	システム制御基礎 (中江 貴志)
物理学基礎 (近藤 隆司)	流体力学基礎・演習 (濱川 洋充)
基礎電磁気学 (近藤 隆司)	建築耐震システム (菊池 健児)
物理学実験 (近藤 隆司)	鉄筋コンクリート構造 (菊池 健児)
電気工学概論 (西嶋 仁浩)	建築設備計画Ⅰ (真鍋 正規)
物理学基礎 (長屋 智之)	建築環境工学Ⅰ (富来 礼次)
情報理論 (田中 充)	情報職業指導 (越智 義道)
応用解析Ⅳ (沖野 隆久)	解析学Ⅱ (田中 康彦)
応用解析Ⅳ (沖野 隆久)	計算機科学概論 (二村 祥一)
応用解析Ⅲ (沖野 隆久)	データサイエンス基礎Ⅱ (和泉 志津恵)
応用解析Ⅲ (沖野 隆久)	データサイエンス演習 (和泉 志津恵)
基礎数学 (開 憲明)	電磁気学Ⅳ (榎園 正人)
力学Ⅰ (後藤 善友)	人間システム計測工学 (榎園 正人)
物理学基礎 (後藤 善友)	電力エネルギー工学 (金澤 誠司)
図学 (今永 和浩)	電気電子制御工学Ⅰ (柴田 克成)
技術者倫理 (佐藤 光雄)	電子回路Ⅱ (緑川 洋一)
応用解析Ⅰ (佐藤 静)	解析学Ⅱ (開 憲明)
測量学実習 (児玉 伸彦)	力学Ⅰ (今野 宏之)
物理学基礎 (小林 正)	材料力学 (今戸 啓二)
力学Ⅰ (小林 正)	システム解析 (松尾 孝美)
物理学基礎 (野本 幸治)	電子回路Ⅱ (上見 憲弘)
身体運動機能学 (岡内 優明)	建築構法 (佐藤 嘉昭)

②平成 25 年度後期授業改善のためのアンケート提出科目

【教養教育】

子どものこころの育ち (田中 洋)
 手作り絵本の楽しみ (廣瀬 剛)
 古典文学講読 (田畑 千秋)
 南アジアの生活文化を知ろう! (財津 庸子)
 版画の楽しみ (久間 清喜)
 日本文化論 (大久保 渡)
 東アジア史の諸相 (甘利 弘樹)
 大分県の歴史Ⅱ (末廣 利人)
 日本語の特徴 (荻野 千砂子)
 バロック音楽の世界 (松田 聡)
 器楽の楽しみ (田中 星治)
 芸術と生活 (貞包 博幸)

【教育福祉科学部】

英語コミュニケーションⅡ
 (シャーリー ジェラルド トーマス)
 英語コミュニケーション中級 B
 (シンプソン リチャード ヒュー)
 異文化理解と英語教育
 (シンプソン リチャード ヒュー)
 英語コミュニケーション初級 B
 (シンプソン リチャード ヒュー)
 環境生物学実習Ⅰ (永野 昌博)
 環境生物学実習 (永野 昌博)
 社会福祉運営管理論 (塩崎 政士)
 衛生学及び公衆衛生学 (玉江 和義)
 ソーシャルワーク概説Ⅰ (隅田 好美)
 生物学実験Ⅱ(コンピュータ活用を含む。)
 (高浜 秀樹)
 生活環境とホルモン (高浜 秀樹)
 生活科指導法(小) (高浜 秀樹)
 技術科授業論 (高浜 秀樹)

環境生物学概論 (高浜 秀樹)
 家族福祉論 (根笈 美代子)
 比較文学論 (佐々木 博康)
 言語・外国語(独)Ⅱb (佐々木 博康)
 英書講読 (佐々木 博康)
 知的障害児の心理アセスメント(佐藤 晋治)
 モデリング研究 (佐脇 健一)
 彫刻ⅠA (b) (佐脇 健一)
 造形基礎演習 (佐脇 健一)
 空間・立体表現実習Ⅱ (佐脇 健一)
 彫刻ⅢB (b) (佐脇 健一)
 彫刻演習 (佐脇 健一)
 家庭科授業論 (財津 庸子)
 家庭科指導法(小) (財津 庸子)
 生活総合演習 (財津 庸子)
 家庭科教育学演習 (財津 庸子)
 化学実験Ⅰ(コンピュータ活用を含む。)
 (芝原 雅彦)
 理科実験Ⅱ (芝原 雅彦)
 体育科指導法(小) (住田 実)
 保健授業論 (住田 実)
 生涯健康論 (住田 実)
 創作表現実習Ⅱ (清水 慶彦)
 音楽鑑賞法Ⅱ (清水 慶彦)
 芸術と鑑賞Ⅱ (清水 慶彦)
 再現芸術 (清水 慶彦)
 作曲法(編曲法を含む。) (清水 慶彦)
 デジタルアート演習 (清水 慶彦)
 コンピュータと芸術 (清水 慶彦)
 気象海洋学実験Ⅱ (西垣 肇)
 地域と環境 (西垣 肇)
 地学実験Ⅱ(コンピュータ活用を含む。)
 (仲野 誠)

吹奏楽法 (西村 一)	表現形式総合論Ⅱ (田中 修二)
管弦楽器Ⅵ(金管) (西村 一)	日本東洋美術史 (田中 修二)
保健体育科授業論 (西本 一雄)	博物館各論Ⅱ (田中 修二)
保健体育科指導法(中) (西本 一雄)	障害児研究 (田中 新正)
音声英語研究 (染矢 正一)	特殊教育論 (田中 新正)
レクリエーション概論 (谷口 勇一)	特別支援教育概論 (田中 新正)
インターネット演習 (谷野 勝敏)	障害児臨床演習 (田中 新正)
技術科プログラミング演習 (谷野 勝敏)	表現基礎実習 BⅡ (ピアノ) b (田中 星治)
コンピュータハードウェア実習 (谷野勝敏)	再現芸術演習Ⅱ (田中 星治)
木材加工学Ⅱ(材料・塗装) (中原 久志)	芸術表現応用 BⅡ (ピアノ) a (田中 星治)
木材加工実習Ⅱ (中原 久志)	再現芸術 (田中 星治)
数学特講Ⅱ (中川 裕之)	ピアノⅥ (田中 星治)
数学科指導法(中) (中川 裕之)	ピアノⅣ (田中 星治)
数学科授業論 (中川 裕之)	ピアノⅡ(伴奏を含む。) (田中 星治)
化学Ⅱ (中島 俊男)	幼児研究法Ⅱ (田中 洋)
コンピュータ英語 (中島 俊男)	幼児臨床指導論 (田中 洋)
計算化学 (中島 俊男)	保育の指導Ⅲ (田中 洋)
宇宙科学実習 (仲野 誠)	幼児心理学 (田中 洋)
天文学と情報処理 (仲野 誠)	国文学史 (田畑 千秋)
地学実験Ⅰ(コンピュータ活用を含む。) (仲野 誠)	古典文学演習 (田畑 千秋)
地学実験Ⅱ(コンピュータ活用を含む。) (仲野 誠)	被服科学 (都甲 由紀子)
比較文化論 (鳥井 裕美子)	衣生活の科学 (都甲 由紀子)
言語・外国語(英)Ⅳ (鳥井 裕美子)	被服構成実習Ⅰ (都甲 由紀子)
異文化接触史Ⅱ (鳥井 裕美子)	生活総合演習 (都甲 由紀子)
英書講読 (鳥井 裕美子)	被服学演習 (都甲 由紀子)
政治学概論Ⅱ(含国際政治) (鄭 敬娥)	社会科授業論 (土居 晴洋)
公民科授業論 (鄭 敬娥)	地域人口論 (土居 晴洋)
ソルフェージュⅡ (田村 洋彦)	人文地理学特講Ⅱ (土居 晴洋)
音楽基礎実技Ⅱ (田村 洋彦)	地理学演習Ⅱ (土居 晴洋)
体育科指導法(小) (田端 真弓)	人文地理学概論Ⅱ (土居 晴洋)
芸術学演習 (田中 修二)	金属加工実習 (島田 和典)
視聴覚メディア論 (田中 修二)	エネルギー変換機械 (島田 和典)
	金属加工学(製図及び実習を含む。) (島田 和典)
	美術科教育演習Ⅱ (冨田 礼志)

クラフトⅡ (富田 礼志)
美術科指導法(中) (富田 礼志)
美術科授業論 (富田 礼志)
表現基礎実習 AⅡⅠ(工芸) (富田 礼志)
木材工芸Ⅰ (富田 礼志)
教育臨床学 (武内 珠美)
スクールソーシャルワーク (武内 珠美)
臨床心理学演習 (武内 珠美)
臨床心理の支援法 (武内 珠美)
心理学特別研究 (武内 珠美)
教育心理学研究法Ⅱ (武内 珠美)
国語表現法 (野坂 昭雄)
教育学研究法Ⅱ (鈴木 篤)
現代の教育課題 (鈴木 篤)
教育研究の基礎 (鈴木 篤)
道徳教育の理論と実際 (鈴木 篤)

【経済学部】

債権各論 (秋山 智恵子)
租税法 (菅野 隆)
憲法Ⅱ (青野 篤)
日本経済史Ⅱ (合田 公計)
地方財政論 (井田 知也)
国際物流論Ⅱ (大井 尚司)
法学入門 (牧 真理子)
法学入門 (菅野 隆)
国際関係論Ⅱ (高山 英男)
企業ファイナンス論Ⅱ (鵜崎 清貴)
保険論Ⅱ (佐藤 大介)
経済学Ⅰ (高見 博之)
経済学Ⅲ (佐藤 隆)
物権法 (藤村 賢訓)
経済学Ⅱ (下田 憲雄)
労働関係法Ⅱ (鈴木 芳明)
経営戦略論Ⅱ (仲本 大輔)

経済地理学Ⅱ (大呂 興平)
人事システム論Ⅱ (幸 光善)
開発経済論 (木村 雄一)

【医学部】

内科系疾病論Ⅱ (浜口 和之)
国際医療・看護論 (浜口 和之)
看護研究方法論 (浜口 和之)
看護理論 (原田 千鶴)
看護実践基盤技術Ⅰ (原田 千鶴)
高齢者支援システム論 (三重野 英子)
老年看護方法論Ⅰ (三重野 英子)
リハビリテーション看護 (三重野 英子)
母性看護方法論Ⅰ (水谷 幸子)
看護アセスメント学Ⅰ (宮崎 伊久子)
基礎看護技術Ⅰ (宮崎 伊久子)
看護実践基盤技術Ⅱ (宮崎 史子)

【工学部】

伝熱学Ⅱ (岩本 光生)
電力システム工学 (後藤 雄治)
エネルギー変換工学 (後藤 雄治)
制御工学Ⅱ (後藤 雄治)
電気回路Ⅰ (高坂 拓司)
流れ学Ⅱ (山田 英巳)
流体力学Ⅱ (山田 英巳)
材料力学Ⅱ (小田 和広)
工業力学 (堤 紀子)
機械材料 (堤 紀子)
機械工作法 (齋藤 晋一)
伝熱応用設計 (齋藤 晋一)
電磁気学Ⅱ (濱本 誠)
リハビリテーション工学 (永野 敬喜)
解析学Ⅰ (開 憲明)
基礎数学 (開 憲明)

波動と光	(後藤 善友)	材料力学	(後藤 真宏)
力学Ⅱ	(今野 宏之)	機械工学基礎・演習	(後藤 真宏)
生物化学	(坂井 美穂)	機構学	(山本 隆栄)
建築CAD製図Ⅰ	(重田 信爾)	システム制御	(中江 貴志)
物理学実験	(小林 正)	機械設計製図	(中江 貴志)
力学Ⅱ	(小林 正)	工作機械・生産工学	(木下 和久)
倫理感性工学	(福永 圭悟)	機械力学	(劉 孝宏)
基礎電磁気学	(野本 幸治)	流体力学	(濱川 洋充)
工業英語	(HARRAN THOMAS JAMES)	流体工学Ⅱ	(濱川 洋充)
メカトロニクスⅣ	(今戸 啓二)	木質構造	(井上 正文)
福祉機器工学Ⅱ	(今戸 啓二)	鉄骨構造	(井上 正文)
電気工学Ⅱ	(小川 幸吉)	建築構造設計Ⅱ	(菊池 健児)
電気回路Ⅰ	(小川 幸吉)	建築構造設計Ⅰ	(菊池 健児)
メカトロニクスⅠ	(松尾 孝美)	構造解析	(菊池 健児)
制御工学Ⅰ	(松尾 孝美)	塑性設計法	(菊池 健児)
人間システム制御工学	(松尾 孝美)	建築計画Ⅱ	(佐藤 誠治)
制御工学Ⅰ	(松尾 孝美)	建築設計演習	(佐藤 誠治)
人間システム制御工学	(松尾 孝美)	建築計画設計演習Ⅰ	(佐藤 誠治)
電子回路Ⅰ	(上見 憲弘)	都市システム工学	(小林 祐司)
生体運動制御論	(前田 寛)	建築環境計画Ⅱ	(真鍋 正規)
メカトロニクスⅢ	(池内 秀隆)	構造力学Ⅰ	(大谷 俊浩)
確率統計	(福田 亮治)	構造力学Ⅰ演習	(大谷 俊浩)
応用解析Ⅱ	(福田 亮治)	建築材料実験	(大谷 俊浩)
確率統計	(福田 亮治)	建築環境工学Ⅱ	(大鶴 徹)
応用化学特別講Ⅳ	(衣本 太郎)	建築環境工学Ⅱ演習	(大鶴 徹)
反応速度論	(永岡 勝俊)	建築環境計画Ⅲ	(富来 礼次)
化学結合論	(氏家 誠司)	建築ワークショップ	(鈴木 義弘)
有機化学Ⅰ	(守山 雅也)	住居論	(鈴木 義弘)
生物有機化学	(石川 雄一)	データサイエンス基礎Ⅰ	(越智 義道)
物質の状態と変化	(大賀 恭)	オペレーションズ・リサーチ基礎	(越智 義道)
基礎理論化学Ⅱ	(大賀 恭)	情報数学	(越智 義道)
物質の状態と変化	(平尾 翔太郎)	数値解析Ⅰ	(原 恭彦)
機械数学Ⅰ	(加藤 義隆)	多変量解析	(原 恭彦)
機械計測工学	(栗原 央流)	数値解析演習	(原 恭彦)

ヒューマン・インタフェース	(古家 賢一)	人工知能基礎	(末田 直道)
マルチメディア処理	(行天 啓二)	電気回路Ⅱ	(金澤 誠司)
解析学Ⅱ	(高阪 史明)	プラズマ工学	(金澤 誠司)
解析学Ⅰ	(高阪 史明)	電磁気学Ⅲ	(戸高 孝)
代数学Ⅰ	(高阪 史明)	電気電子材料	(戸高 孝)
コンピュータグラフィックス	(西野 浩明)	電気機器工学Ⅰ	(戸高 孝)
オペレーティング・システム	(西野 浩明)	電気電子数学Ⅱ	(市來 龍大)
情報英語	(西野 浩明)	電気電子制御工学Ⅱ	(柴田 克成)
計算機アーキテクチャⅡ	(川口 剛)	プログラミング	(柴田 克成)
デジタル回路	(大竹 哲史)	通信方式	(秋田 昌憲)
アルゴリズム論	(中島 誠)	電気工学概論Ⅱ	(秋田 昌憲)
解析学Ⅰ	(田中 康彦)	電気回路Ⅳ	(大久保 利一)
代数学Ⅰ	(田中 康彦)	電磁気学Ⅱ	(大久保 利一)
ウェブサイエンス	(二村 祥一)	電子回路Ⅰ	(緑川 洋一)
解析学Ⅰ	(末竹 千博)	熱力学	(近藤 隆司)
代数学Ⅰ	(末竹 千博)	物理学実験	(長屋 智之)
代数学Ⅱ	(末竹 千博)	電磁波工学Ⅱ	(田中 充)

(12) センター業務に関わる研修報告(協議会, 学会, 研究会都への参加)

本部門の活動のために、教育改善・教育改革に関する学会や研修会等へ参加し、全国的な傾向や他大学での取り組みに関する情報を収集している。本年度に参加した学会、研修会等は以下のとおりである。

①大学 FD 勉強会 2013 「FD 推進のための授業評価事例～その取り組みと改善効果～」

平成 25 年 5 月 10 日 (金) 東洋大学 (白山キャンパス)

②第 4 回「教育 IT ソリューション EXPO」

平成 25 年 5 月 16 日 (木) から 17 日 (金)

(東京ビッグサイト) 専門セミナーへの参加と、教育用 ICT 機器の展示会観覧

- ・「新しい図書館は、どのように教育改革・国際化に貢献する？」

東京大学 附属図書館副館長 大学院総合文化研究科 石田英敬氏

- ・「ポートフォリオの導入で学生の主体性が向上、進路決定率 UP!」

武蔵野大学 学生部長 北條 英勝氏

- ・「国境を越えたオープン教育が大学のあり方を変革する」

(一社) 日本オープンオンライン教育推進協議会 事務局事務局長 福原 美三氏

- ・「全県立高校新入生 7,000 人に学習用 PC 導入！～ICT 教育先進県佐賀の実績とこれから～」
佐賀県教育委員会 副教育長 福田 孝義氏

③第 96 回長崎大学 FD 教育革新シンポジウム

「主体的な学びを促進する支援環境について考える」

平成 25 年 9 月 12 日（木） 長崎大学（中部講堂）

④東海教育サロン「ラーニングバリュー～学生の『主体的な授業外学習』へのチャレンジ～」

平成 25 年 9 月 28 日（土） 愛知薬科大学

⑤長崎県立大学 FD「授業公開・検討会」FDer として参加依頼

2014 年 1 月 16 日（木）

⑥茨城大学フォーラム「平成 25 年度産業界のニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業」

「アクティブ・ラーニングの全学展開を考える」

2015 年 2 月 13 日（木）茨城大学（水戸キャンパス）

- ・基調講演 愛媛大学共通教育センター副センター長 庭崎 隆氏

- ・PBL 授業の全学展開 大学教育センター 鈴木敦氏

- ・インターンシップの全学展開 NPO 法人 ETC チャレンジコミュニティプロジェクト
事業部マネージャー 伊藤淳司氏

- ・総括～アクティブ・ラーニングの全学展開を考える～ 大学教育センター長 佐藤和夫氏

⑦2015 年 3 月 18・19 日（火・水）第 20 回大学教育研究フォーラム（京都大学）

シンポジウム 「学生の学びをどうデータ化し、どう利用するか？」

4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門

高等教育開発センターにおける生涯学習関連業務は、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の2部門が連携して実施し、本学における教育及び地域社会の発展に寄与する観点から、本センターが持つ研究開発機能を基盤にして、緊急且つ重要な事業、日常的に行う事業等に分類し、軽重をつけて実施することとし、次の2部門において生涯学習社会の形成に向けて以下の業務を行った。

- ① 大学開放推進部門において、公開講座・公開授業及び県民・学生への現代的課題への対応に関する学習機会の提供等の大学開放を推進する。
- ② 生涯学習支援システム部門においては、県内の生涯学習行政や高等教育機関、各種活動組織等とのネットワーク化による県民の生涯学習を支援する。

ただし、生涯学習を推進するためには、学習機会を提供する側の機能（本学）と学習機会を活用する側（県民及び行政）のニーズとを適切に結びつけることが必要であり、本センターにおける取組も、大学開放推進部門と生涯学習支援システム部門の共同で協議を行い、連動して業務を推進してきた。また、センターの統合のメリットを最大限に生かし、高等教育関連部門との連携による生涯学習関連の情報提供の充実の取組や、生涯学習関連の授業のオンデマンド化等を行った。さらに、公開講座・公開授業の充実を中心とした本学の社会連携推進部門会議との連携、生涯学習に関わる学内の諸部局との連携を行った。

また、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の推進の基盤となる調査研究においても、県及び市町村教育委員会生涯学習行政との連携によって、現代的な課題に関する分析・研究を行いつつ、生涯学習・社会教育計画の作成や指導者の育成等に関する指導的業務を担ってきた。

【平成25年度の主な取組】

主な事業

平成25年度は第2期中期計画4年次にあたり、本センターが平成22年度に策定した「連携GP等への取組及び地方自治体をはじめとする地域の関係機関との連携を進めるとともに、これらの取組を推進するための体制整備の方針」の発展への取組を行った。具体的には、平成25年度計画では「県民の生涯学習支援や指導者育成による地域づくりを促進するため、学外の機関・団体・企業等による県内のネットワークの更なる拡大を図るとともに、学内の教育機能のネットワーク化などによる高等教育機能を発揮するシステムづくりを行う。」ため、これまでの実践を基盤にして次のような重点施策に取組、多くの成果をあげた。

- ①公開講座、公開授業、指導者育成講座等の実施について引き続き関係大学や市町村、大分県「協育」ネットワーク協議会等との連携や、ホームページ「おおいた『協育』ポータル」の開設をするなどして、大学開放事業を広く県民へ広報して受講者層の広がりを進めた。
- ②平成23年度に本センターが中核となって設立した大分県「協育」ネットワーク協議会や、本センターが実施する「協育」アドバイザー養成講座の修了生で組織するNPO法人「大分県『協育』アドバイザーネット」を育成するなどして、更なる支援・指導を行いつつ、県内の教育の協働に関するネットワーク化を推進した。

③学生のキャリア教育を生涯学習の視点から推進する「学習ボランティア『フォーバル』」の活動支援や、中小企業と連携したキャリア形成に関する取組を推進した。

【平成 25 年度の事業内容】

(1) 大学開放と学習機会の提供

本学が持つ高等教育機能を発揮し、県民に対して直接に様々な学習機会を提供することは地域の大学としての価値と存在感をアピールするうえで重要であり、次のような取組を行った。

1) 公開講座

公開講座は、各学部が実施する講座と、本センターが現代的な課題に対応して実施する講座で構成され、開催方法としては、本学が主催する「主催講座」と市町村教育委員等と協同で行う「連携講座」となっている。

平成 25 年度公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間	実施時間数	受講者数
1	大分大学米水津塾	米水津地区公民館 大分大学内	6月30日～3月30日	9.5	24
2	小学校外国語活動担当者のための英語発音講座	大分大学内	6月5日～7月3日 (5回)	10	11
3	肺がんってどんな病気？/肺がんの新たな診断方法	ホルトホール大分	8月7日	2	22
4	肺がんの手術/肺がんの抗がん剤治療	ホルトホール大分	8月21日	2	31
5	脳脊髄液は本当に漏れるのか？-脳脊髄液漏出症の基礎医学-	ホルトホール大分	8月28日	2	36
6	睡眠と健康	ホルトホール大分	9月4日	2	37
7	放射線が人体へ及ぼす影響	ホルトホール大分	9月11日	2	36
8	泳げない子どもの水泳教室	大分大学内	7月26日～8月2日 (7日間)	21.5	77
9	身近な大分の化石収集	大分大学内 採石場：緒方市	8月3日～4日	7	30 家族 (70名)
10	理科や算数を使って親子で遊ぼう	大分大学内	7月13日～8月31日 (8回)	16	15 家族 (32名)
11	夏休み子ども造形美術教室	附属中学校内	8月3日～4日	6	32

12	夏休み数学講座	大分大学内	8月9日	3	43
13	豊の国学 中央講座 リレー講演会	ホルトホール大分	8月3日	4	34
14	豊の国学 分野別講座	ホルトホール大分	8月31日, 9月14日・24日	8	46
15	将棋講座	大分大学内	8月26日～30日 (5日間)	15	59
16	「協育」アドバイザー養成講座 上級編	熊本県・福岡県	9月20日～9月21日	20日 8時～ 21日 17時	11
17	「教育の協働」推進のための公開講座 (玖珠町)	玖珠町	10月31日	2	57
18	「小さな世界企業」に学ぶ地域ビジネス のヒント	ホルトホール大分	9月24日～10月24日 (5回)	10	34
19	「協育」アドバイザー養成講座 基礎編	大分大学内	10月30日	6.5	20
20	「協育」アドバイザー養成講座 中級編	大分大学内	3月15日 3月16日	12	14
21	小学生ラクビー教室	大分大学内	2月2日～3月16日 (6回)	15	10

平成25年度の公開講座は、前期16講座、後期4講座、年間講座1講座の計21講座（前年度：28講座）を実施した。内訳は、成人対象講座14講座で受講者413名（前年度：856名）、子ども・家族対象講座7講座で受講者323名（前年度：1,590名※内、「子どもサイエンス2012」の17教室1,250名を含む）となり、受講者の合計は736名（前年度：2,106名）であった。成人対象講座の応募者は全て定員内で受講できた。子ども・家族対象の講座では、昨年度のみの実施の「子どもサイエンス2012」の1,250名を除くと受講者数はほぼ例年どおりである。

平成24年度から「とよの学びコンソーシアムおおいた」の公開講座として開設している「豊の国学」番号の（13と14）で受講生が80名である。各学部から各1名の教員を推薦して、大分大学からは4の教員が講師ととして担当するシステムができた。

＝公開講座に関する過去7年間の講座数及び受講者数の変化＝

本センターの統合2年前（平成18年度）から統合6年後（平成25年度）の8年間の講座数及び受講者数を示したものが図1である。

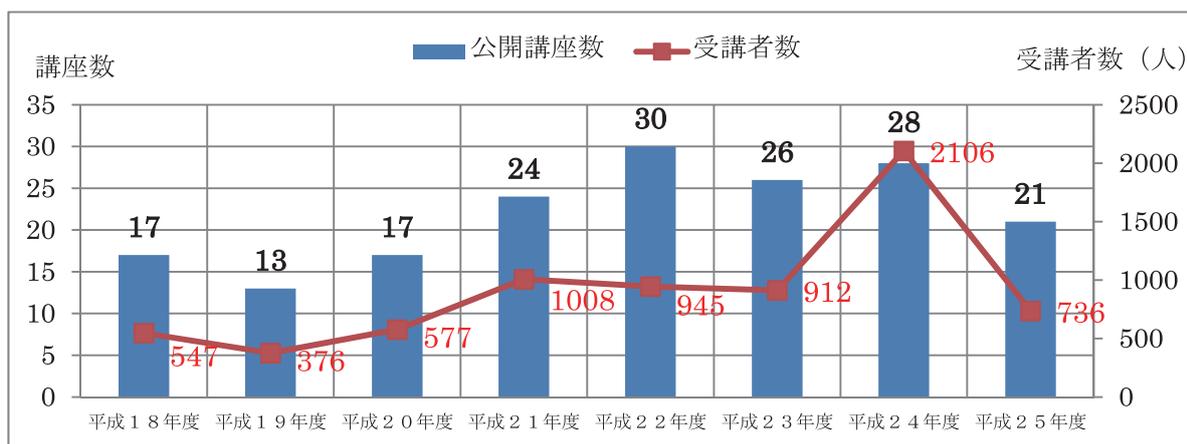


図1 過去8年間の公開講座の実施状況

平成21年度の受講者数は、単年度事業として竹田市の公民館学級開校式と共催して実施した出前講座（286名）、平成24年度は当年度のみの「子どもサイエンス2012」の17教室1,250名を含む関係である。全体の傾向としては、平成21年度から若干増加して、横ばい傾向である。

しかし、近年は県内のNPO法人や地域の組織・団体等と共催した交流会や研修会等を「公開講座」としてでなく、指導者育成事業として実施している。

※（2）センター主催事業、2）生涯学習指導者研修事業で詳細を掲載

今後とも、県民の生涯学習機会の提供として継続して実施する講座に加え、講座の数の増加という視点だけではなく、実施目的を明確にした高等教育機関で出来る指導者養成や青少年の課題への対応など、県民のニーズに応える講座の開設が必要であると考えている。

2）公開授業

公開授業は、正規の授業を開放して学生と共に専門的な教育内容を体系的に学ぶ場を提供するものであり、各学部及び個々の教員からの申請で実施している。

平成25年度の公開授業は、前期68科目（前年60科目）、後期48科目（前年55科目）で計116科目（前年115科目）となっている。また、受講生は前期が145名（前年87名）、後期が93名（前年77名）の合計238名（前年度：164名）である。

平成25年度大分大学公開授業

前期			後期		
番号	講座名	受講者数	番号	講座名	受講者数
1	基礎中国語Ⅰ（月1）	0	59	組織革新論Ⅰ	2
2	企業組織法Ⅰ	3	60	政治経済学Ⅰ	1
3	生涯学習論入門	1	61	英語Ⅰ（金3）	3
4	文化人類学	4	62	現代資本主義論Ⅱ	0
5	地域と情報	4	63	環境生物学Ⅰ	1
6	西洋美術史	5	64	都市経営論Ⅰ	0

7	農村発展論 I	3	65	身体感覚の知覚演習	1
8	教養ドイツ語 I	4	66	世界史概説 II	3
9	環境物理学	0	67	国文法研究	1
10	小学校外国語活動指導法	3	68	システム L S I 設計特論第 1	2
11	言語・外国語 (独) I a	1	69	基礎中国語 II	1
12	電気工学概論	4	70	化学 IV	0
13	経済統計を読む	2	71	企業組織法 II	2
14	基礎中国語 I (火 1)	0	72	カラダの見方・考え方	5
15	生命観の変遷	2	73	自然災害と福祉・教育	4
16	比較経営史 I	0	74	農村発展論 II	1
17	電気化学	1	75	言語・外国語 (独) IV	0
18	応用中国語 I	1	76	英語科授業論	2
19	英語 I (火 3)	0	77	教養ドイツ語 II	2
20	体育学概論	1	78	国文学史	3
21	医療倫理	2	79	哲学概論 I	2
22	英語 I (火 4)	3	80	言語・外国語 (独) II a	0
23	哲学概論 II	1	81	比較経営史 II	0
24	臨床心理学	10	82	世界の教育	1
25	古典文学特講	5	83	身近な物理学	2
26	地域芸術文化研究	1	84	基礎中国語 II	1
27	美学・美術史概論	2	85	応用中国語 II	1
28	根拠への問い	0	86	プログラミングと言語	4
29	科学技術コミュニケーション入門	1	87	臨床心理学演習	11
30	福祉と工学技術	1	88	美術鑑賞論	1
31	地域と財政	2	89	科学技術コミュニケーションの デザインと実践	0
32	現代天文学と SETI	4	90	教育の社会学	0
33	大分の水 I	10	91	大分の水 II	8
34	労使関係論	0	92	生命科学と社会	1
35	社会教育から見た教育の「協働」	1	93	仕事と社会	4
36	企業の価格戦略と消費者の行動	0	94	成人教育方法入門	1
37	国際関係論 I	0	95	コミュニケーション能力養成入門 II	1
38	老年看護学概論	8	96	国際関係論 II	0
39	英語 I (木 2)	4	97	有機化学 I	0
40	音楽史 II	4	98	電気も車もないアーミッシュ社会	2
41	資本主義発達史 I	0	99	地域ガバナンスとグローバル ガバナンスを考える	1
42	応用英語 E	2	100	英語 I	4
43	英語 II (木 3)	2	101	保健統計学	0
44	EU の政治経済	1	102	グローバル化と政治経済	3

45	消費者教育	1	103	英語Ⅱ	2
46	国語史	4	104	近代ドイツ文化論	1
47	企業ファイナンス論Ⅰ	3	105	保険論Ⅱ	1
48	保険論Ⅰ	2	106	応用英語 E	0
49	音響工学	1	107	身体表現実習	0
50	英語Ⅱ（木4）	1	108	ダンスⅠ	2
51	The Japanese News Media and Globalization	0	109	英語ゼミナール17	7
52	身体表現基礎	3	110	労働関係法Ⅱ	0
53	地理学基礎・読図入門	2	111	表現形式総合論Ⅱ	3
54	世界・日本・大分の農業経済論	4	112	都市経営論Ⅱ	0
55	応用ドイツ語Ⅰ	0	113	国語学概論	3
56	英語ゼミナール16	5	114	プログラミング言語 演習Ⅰ	4
57	言語・外国語(中)Ⅲ	0	115	数値解析	0
58	労働関係法Ⅰ	2	116	日本東洋美術史	2

＝公開授業に関する過去11年間の講座数及び受講者数の変化＝

本センターの統合5年前（平成15年度）から統合5年後（平成25年度）の11年間の公開授業数及び受講者数を示したものが図2である。

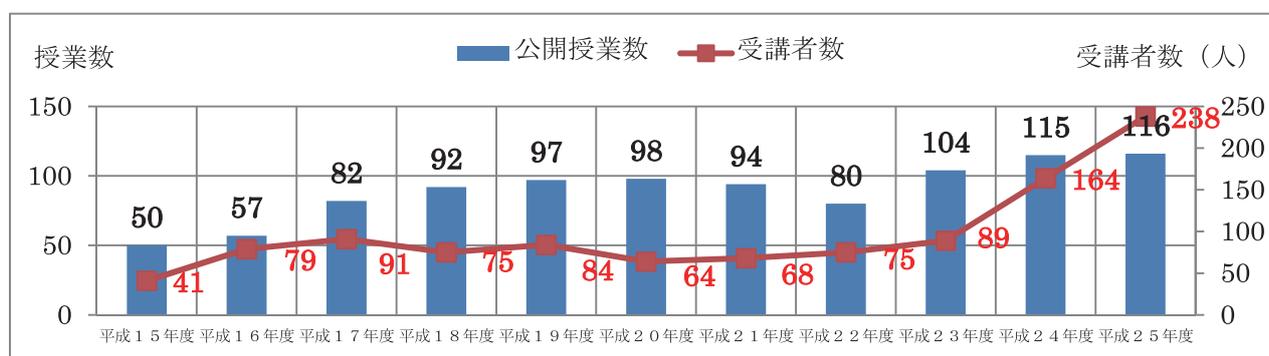


図2 過去11年間の公開授業の実施状況

公開授業数は、平成20年度の98授業をピークに減少傾向であったが、23年度は100授業を超え、平成25年度は116授業を公開した。受講者数も平成17年度をピークに減少傾向であったが23年度は89名で過去最高に近づき、平成24年度、平成25年度と大きく増加している。授業を公開しても受講者がいない授業もある。グラフで特徴がある年度の無受講者授業の割合をみると、平成16年度は35%、平成17年度は49%、平成20年度は55%、平成23年度は49%、平成24年度は38%、平成25年度は25%である。公開授業数に対して受講者数が多い平成16年度、17年度は1授業への受講者数が複数であったのことに比較して、平成18年度以降は1授業あたりの受講者数が少ないという特徴が見られる。公開授業の開始当初は集団での受講であったことが、次第に個人のニーズに沿った個人型学習の傾向へと変わってきたことがうかがえるが、平成25年度は、公開した授業の75%への受講者とともに、3名以上の受講者があった科目が31%あり、幅広い科目に複数の受講者があったことがわかる。その要因としては新聞への折

込、組織やホームページを活用した広報の充実であると評価している。

3) 公開講座・公開授業料収入

公開授業・講座数及び受講者数の変化は前述したとおりであるが、平成 24 年度の工学部の公開講座などに見られるように、年度において特殊な場合があるために、「受講料収入」で変遷を示したものが図 3 である。



図 3 過去 11 年間の公開事業料収入の変化

平成 19 年度以降の減少要因は、社会のニーズに対応した指導者層の育成のための無料の公開講座の開設や青少年対象の低額の公開講座の開設等に伴うものであるが、受講対象者を指導者層や青少年等に拡大することにより、地域貢献を強くアピールすることができた。平成 23 年度からの収入の増加は、公開授業・公開講座とも開講数の増加もあるが、有料であってもニーズが高い授業の公開と広報の充実が大きく要因していると捉えている。

(2) センター主催事業

生涯学習社会形成の方策として、現代的な課題に関する講座の開設や調査研究を通じた地域貢献と学生への学習支援、及び市町村等との連携による地域が抱える課題に対する学習支援を行った。

1) 公開講座

前述した公開講座のうち、表に示すような本センターが主催する 7 の主催講座と、他大学や市町村教育委員会等と共催または共同して開催する 8 の連携講座を実施した。

本センターが主催した講座は、各学部が実施する講座に加え、市町村 NPO 法人、地域の活動団体との連携講座の拡充を行った。さらに、子ども達の自然体験・生活経験の欠損が指摘される中、子ども対象やその家族をも含めた講座なども開催した。子ども達の自然体験・生活経験を充実させるためには家族全体のライフスタイルを転換する必要があることから、家族単位で参加する講座も充実させている。それに加えて、青少年健全育成のための活動を行う団体等の研修をとおして、課指導者のネットワークを推進する研修会等を開催した。

平成 25 年度高等教育開発センターが実施した公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間
1 共催	大分大学米水津塾	米水津地区公民館	6/17~2/17 (7回)
2 共催	身近な大分の化石収集	大分大学内・豊後大野市	7/21~22 (2回)
3 共同	世界のコトバ, コトバの世界	大分県立芸術文化短期大学, 立 命館アジア太平洋大学	9月~12月 (8回)
4 主催	大分再発見講座 子どもふるさと体験学インクにさき	国東半島両子寺周辺	8/8~10 (3回)
5 主催	将棋講座	大分大学内	8/23~25 (3回)
6 主催	豊穡の里海体感講座	大分県マリンカルチャーセンター	9/1~2 (2回)
7 共同	豊の都市まなび直し講座ー今から取り組む実年期 の健康な暮らしー	大分大学内	9/2, 9 (2回)
8 共同	豊の国学	大分県立芸術文化短期大学	9/29
9 主催	「協育」アドバイザー養成講座 上級編	佐賀県佐賀市	9/25~26 (2回)
10 主催	「教育の協働」推進のための公開講座 (市町村連携)	大分県立社会教育総合センター	11/23
11 共同	多文化共生社会のために	大分県立芸術文化短期大学	10月~11月 (3回)
12 主催	「協育」アドバイザー養成講座 基礎編	大分県立社会教育総合センター	11/23
13 共同	ラグビー教室	大分大学内	2/10~3/17 (5回)
14 主催	「協育」アドバイザー養成講座 中級編	大分大学内	3/16~17 (2回)
15 主催	大人の遠足ー身近な水と私たちの暮らしー	湯布院, 九重町田野	3/23

2) 生涯学習指導者研修事業

※詳細は「協育」事例集教育の創造～地域「協育」のススメ（第3巻）（大分大学高等教育開発センター発行）をご覧ください。

あまんきみこ氏講演会『子どもと本を結ぶあなたへ』

童話作家の想い～一冊の本ができるまで～

本講演会は、童話作家「あまんきみこ」氏の童話への想いをおして、学生の教養としての学びを深めるとともに、地域でのボランティア活動として大切にされている「読み聞かせ」についての意識の醸成を目的として、一般のボランティアの方々にも作家の生の声（「想い」）を聞いていただき、読み聞かせの悩みも語り合うなどして、みなさんの横の繋がりを作るお手伝いをしながら、これからの活動に役立てていただければと願って開催しました。

「子どもたちにたくさんの本と出会って欲しい」と読書支援に関わる者として常に考えています。子どもたちが本に出会うには、文章や絵を書く作家、本という形にする出版関係者、そして、その本を子どもに手渡す者（子どもと本を結ぶ）が必要です。「子どもと本を結ぶ」手段として、読み聞かせや朗読をしている私たちにとって、「作品に込められた想い」を伝えたい、また、そうすることが読み手の役割だと考えます。一冊の本ができるまでのご苦労とその過程を経て出来上がった作品への想いを聞かせていただくことは、私たちのこれからの活動にとって大変貴重で意義あるものだと思います

今回、小学校の教科書でもなじみ深く、読み聞かせでも多くの作品を使わせていただいています童話作家「あまんきみこ」氏に作家としての想いや作品の成り立ちなどのお話をうかがいたいと思いました。そして講演会終了後の交流会は、「読書に関わる方々が繋がり、本を通して子育てを！」という想いを語り合い、これからの活動に生かしていただくために開催しました。

主催 大分大学高等教育開発センター 大分大学学術情報拠点（図書館）

共催 NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット

「ゆい（結い）」人と本を結ぶ読書支援プロジェクト

会場：大分大学学術情報拠点（図書館）

日時：平成25年9月30日（水）10：00～12：30

第1部 講演（対談）

内容：あまんきみこさんの友人の「鬼が島文庫主宰 千竈八重子」（由布市で活動中・紙芝居文化の会おおいた代表）と対談しながら童話への想いを語ってくれました。

*講師紹介 大分大学2年 外池夏子 *謝辞 大分大学4年 松尾美幸

第2部 交流会（参加者交流会）

内容：1グループ10人程度で8グループになって、各グループ進行役を中心にして、日常の活動の喜びや悩み、選書の工夫等の活動を交流しました。



<指導者研修2>

<「協育」見本市>第7回 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会

近年、青少年を取り巻く様々な課題や団塊世代・高齢者の地域参加の促進等が指摘されているところであり、学校や家庭、地域における様々な取組の連携・協力の必要性が言われています。こうした現状の中、県内各地で各種団体等の独自の取組、地域が学校と連携した取組などが行われています。

本交流会は、こうした県内各地の実践者が自主的に集い、実践事例を交流することによって大人自身の活動エネルギーを蓄えるために、大分県生涯教育学会や、福岡県を中心に活動する「NPO法人幼老共生まちづくり支援協会」などの協力をいただき、さらに、地元教育委員会・生涯学習団体等と協力して開催するものです。多くの方々の参加をいただき事例を基にして地域づくりを熱く語りましょう。

運営委員長 林 浩昭（東国東地域デザイン会議会長）

テーマ 「大いに語ろう～大人がする子ども育て、子どもが活躍するまちづくり～」

主催 東国東地域デザイン会議 大分大学高等教育開発センター
NPO法人幼老共生まちづくり支援協会

協力 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット
大分県「協育」ネットワーク協議会 大分県生涯教育学会

会場 「梅園の里」 〒873-0355 国東市安岐町富清 2244 Tel0978-64-6300

期日 平成26年3月1日（土）～2日（日）

日程

一日目	10:30 開会行事
	10:50～基調提案「『世界農業遺産』の意義と子ども達へ継承する大人の役割」 講師 国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会長 (東国東地域デザイン会議会長) 林 浩昭 氏 基調報告：今求められる「地域ネットワーク」の取組 講師 広島経済大学経済学部 准教授 志々田まなみ氏
二日目	12:50～実践事例発表 ○第1分科会 学校教育等への地域・家庭からの支援・協力の事例（5事例） ○第2分科会 学校を中心とした読み聞かせ活動の事例（5事例）
	16:30～17:10 特別講演 演題 「教育がつくりだす心の危機」 講師 三浦清一郎 氏（生涯学習・社会システム研究者）
	9:30～11:50 大いに語ろう！ ～読み聞かせ・学校支援活動等のグループに分かれて交流会～ テーマ「子どもたちの未来のために活動する成果と課題」 (※テーマに関する日頃の活動を班別に意見を自由に交換します)

会場 ☆梅が咲き誇る三浦梅園生誕の地～「梅園の里」～☆

参加費 無料 (500円資料代等実費) ※宿泊費等は別途必要です。

申込方法 ○別途「参加申込書」での詳細な参加内容を申し込み願います。

○平成26年2月19日(水)までに申し込み下さい。※当日参加も受け付けます。

第7回 地域発「活力・発展・安心」デザイン交流会 報告者一覧

1. 基調報告

林 浩 昭	国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会長(東国東地域デザイン会議会長)	『世界農業遺産』の意義と子ども達へ継承する大人の役割
-------	-------------------------------------	----------------------------

2. 基調提案

志々田まなみ	広島経済大学経済学部准教授	今求められる「地域ネットワーク」の取組
--------	---------------	---------------------

3. 分科会事例

第1分科会:学校教育等への地域・家庭からの支援・協力の事例(5事例)

○司会者:大分県立社会教育総合センター社会教育主事 矢野 修

氏名	役職・所属	事例内容
加来 久雄	東陽中学校区協育コーディネーター	学校と協働した支援プログラムについて ~豊陽中学校ネットワーク会議の実践より~
尾崎 紀美子	弥生地区「協育」コーディネーター	公民館を拠点とした地域教育の協育の推進について
梅尾 矢代畏	湯布院中学校区コーディネーター	湯布院中学校区地域協育
梶原 里穂 宇野 優希 山下 露姫	大分大学学習ボランティア「フォーバル」 ボランティアサークルグループ「WITH」	「大学生による地域づくりの実践」
マクビーン光子	笑わせたいわ笑学校事務局	「笑い」香生み出す人間関係が無縁社会を変える?!

第2分科会:学校を中心とした読み聞かせ活動の事例(5事例)

○司会者:大分大学高等教育開発センター准教授 岡田正彦

平川佳代子	よみきかせタイ夢	はじめ
佐藤 泰子	大分市立鷺野小読み聞かせボランティア 「お話ウルトラマン」代表	無せず, 気張らず, ゆるゆると
田中 博恵	国東市富来小学校 研究主任	本に親しみ, 図書館を活用する子どもの姿を描いて!
飯田 干美	九重町立飯田小学校と南山田小学校 の学校司書	子どもと本をつなぐ 学校司書のできること
武本 幹夫	一般社団法人プテラ 代表理事	iPad と英語を活用した, 留学生と子どもたちの国際交流活動“e-KAMISHIBAI”

4. 特別講演

三浦清一郎	演題 医者から見えない教育問題, 教育者が作りだす「過剰自己愛による挫折」
-------	---------------------------------------

< 指導者研修 3 >

「『協育』アドバイザー養成講座」の取組

改正教育基本法や教育振興基本計画をふまえ家庭・学校・地域が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的として「学校支援地域本部事業」が始まり6年が経過した。その間、家庭、学校、地域社会の相互の連携協力を促し、それぞれの教育力を向上させるとともに、教育を協働して行う取組が急激に進んできた。大分県教育委員会は、それ以前の平成17年度から施策として取組始め、子どものために家庭・学校・地域が協働する「教育の協働（協育）」を推進してきた。

本講座は、こうした取組に対して民間の教育力を発揮し、「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進するために、地域ぐるみでの学校や地域での子どもの健全育成や家庭教育への積極的な支援、福祉と教育の融合、及び大人社会の再構築を推進する中核的な人材の養成を行うことを目的として平成21年度から開講している。受講者はこれまでに123名で、開講する「基礎編」「中級編」「上級編」の3つの講座すべてを受講した方は25名にであり、職業や地域活動を持ちながら日程を調整しての受講だが、徐々にネットワークが広がっている。

さらに、受講者で組織する「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」は、大分県教育委員会が進める、子どものために家庭・学校・地域が協働する「教育の協働（協育）」を、民間団体として推進する法人として平成22年に設立した。会員は、日常的に地域活動をしている方々が、大分大学高等教育開発センターが実施する「『協育』アドバイザー養成講座」を受講して、その趣旨を理解し、会員のネットワークを活用してそれぞれの活動を充実しようとするメンバーである。

NPO法人としての活動は「高まろう（学ぶ）」「広めよう（事業）」「繋がろう（情報）」の3つの柱で、特に「広まろう」の活動をとおして、「協育」のためのコーディネートの大切さを探っている最中である。NPO法人としての今年度の具体的な事業として、文部科学省の事業を受託して、別府市における「地域からの学校支援事業」の取組や、子どもゆめ基金の補助を受けて、県内の小・中・高・大学生で国東半島の中心、両子山周辺での2泊3日の宿泊自然体験事業を行った。さらに、昨年度からの県事業（幼児エコ活動）の受託、法人としての指導者研修など、大分大学高等教育開発センターの支援を受けながら「協育」の推進を行っている。

平成25年度の養成講座のプログラムは以下の通りである。

<平成25年度第4期生「『協育』アドバイザー養成講座」【上級編】>

○期日 平成25年9月20日(金)
大分大学発～(1泊2日)
21日(土) 17:00
大分大学着

○参加者数 11名

○視察先

平成25年9月20日(金)
13:00～16:00

①熊本県益城町立益城中央小学校

〒861-2244 熊本県上益城郡益城町寺迫
1142 番地 tel:096-286-2031



○益城町は、学校支援地域本部事

業においてコーディネーターを中心とした学校支援システムが充実しており、平成24年度の文部科学大臣表彰を受賞しました。その中心的な学校の取組とコーディネーターの活動などについて学びます。

平成25年9月21日(土) 10:00～14:00

②福岡県久留米市の子育てグループ「パパラフネットくるめ」等の方々との交流

○久留米市は子育てサークルの活動が進んでおり、その中の「父親の子育て参画」の推進を行っているサークルメンバーを中心に、様々な活動を行っているの方々との交流を行います。

<平成25年度第5期生「『協育』アドバイザー養成講座」【基礎編】>

○日時 平成25年10月30日(水) 9:00開講 ～ 16:30閉講

○受講者数 22名

○講座の内容

研修1: 9:00～9:40 「『協育』アドバイザー養成講座」について
大分大学高等教育開発センター 教授 中川忠宣

研修2: 「子どもと本を結ぶあなたへ」の講演会へ参加

研修2-1: 10:00～11:20 インタビューダイアログ

子どもと本を結ぶあなたへ「あまんきみこ氏」

「童話作家の想い～一冊の本ができるまで～」

講師: あまん きみこさん (児童文学作家)

対談者: 千竈八重子さん (鬼が島文庫主宰・紙芝居文化の会おおいた代表)

研修2-2: 11:30～12:30 読書活動のネットワークづくりのための交流会

※読み聞かせなどのボランティアの方々にも、作家の生の声(「想い」)を基にして悩みを語りあいながら、みなさんの横の繋がりを作るお手伝いをさせていただきます。

担当: NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット 佐藤真由美

研修 3 : 13:10~15:20 教育の協働の必要性と大分県・全国の状況

※教育の協働に関する大分県及び全国調査から、その意義や推進方策等についての研修

講師：大分大学高等教育開発センター 中川忠宣

研修 4 : 15:30~16:10 実践を通じた「教育の協働」の意義を学ぶ

～NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動について～

※教育の協働を支援・推進することを目的にして活動するNPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの方針や事業に関する研修

講師：NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット 梅野悦子

<平成25年度第5期生「『協育』アドバイザー養成講座」【中級編】>

○日時 平成26年3月15日(土)・16日(日) 9:00開講 ～ 16:30閉講

○受講者数 16名

○講座の内容

8. 講座の内容

	時間	内 容
一 日	9:00 ～	開講式(挨拶・説明)
目	9:20 ～11:00	講義1 学校教育の現状・課題と教育の協働の視点 講師 大分大学教育福祉科学部 教授 山崎清男 佐伯市立上堅田小学校 教頭 伊東俊昭
	11:15 ～14:00	講義2 地域社会の現状・課題と教育の協働の視点 講師 大分大学高等教育開発センター 准教授 岡田正彦
	14:15 ～16:15	講義3 教育の協働を推進するコーディネート機能の現状 講師 大分大学高等教育開発センター 教授 中川忠宣 演題：「全国調査から見える教育の協働推進システムと大分県の取組」 講師 大分県立社会教育総合センター社会教育主事 矢野 修 演題：「大分県におけるコーディネートの現状調査から見えるもの」
二 日	9:00 ～10:30	講義4 不登校やひきこもりの若者たちを応援する教育の協働の視点 講師 NPO法人ピアサポートしづや 理事長 相川良子氏
目	10:45 ～12:00	講義5 子どものための「協育」を推進するコーディネーターの実際 ～全国のキャリア教育コーディネーターの活動事例を含めて～
	13:00 ～16:00	講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏 熟議 地域の人の支援を広げて企画する「子どものためのプログラム」作成 講師 NPO法人ピアサポートしづや 理事長 相川良子氏 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク 理事長 生重幸恵氏
	16:20 ～	閉講式(修了証授与・アンケート等)

(3) 学生の生涯学習機会の提供～学習ボランティア『フォーバル』の活動～

「学習ボランティア『フォーバル』」の活動は、「学習ボランティア入門」や「生涯福祉論」等の授業と連動させることによって、学生のボランティア活動のシステムづくりを行った。年度当初の募集や研修会などを通して、平成 25 年度は新規に学習ボランティアに登録した学生が 38 名あり、これまでの活動を系統的に行う 3 つの自主サークルの活動の基盤作りができた。

* 「フォーバル」とは

Oita University Volunteer Activity for Lifelong Learning=「Fouvall」

※詳細は「協育」事例集教育の創造～地域「協育」のススメ（第 3 巻）（大分大学高等教育開発センター発行）をご覧ください。

1) 地域との交流サークル「WITH」の活動

このグループは、今年卒業した社会福祉コースの先輩方 3 人が 2 年前に立ち上げました。先輩方が当時受けていた講義の中に、「地域福祉論」というものがあり、その講義の内容に触発されて、自分たちで立ち上げたそうです。「WITH」というグループの名前には、「地域の人たちと“一緒に”地域をつくっていく」という意味が込められています。活動の目的は、大きく分けて 2 つあります。1 つ目は、大学生と地域のつながりをつくるということです。つながるきっかけを与えるという意味です。そして、2 つ目は、災害時に助け合いの出来る地域づくりを行うことです。これは、単に防災訓練や、災害マップをつくる、という意味ではなく、災害があったときお互いを助け合えるような関係性の構築をしていく、という意味です。

現在、メンバーは、1 年生 6 名、2 年生 3 名、3 年生 1 名の計 10 名です。週 1 回のミーティングでイベントの企画や準備、イベント後の反省を行っています。今年度は、WITH のメンバーでの研修、昔の遊び教室、地域座談会などの活動を企画しました。また、地域で行われるイベントへの参加も積極的に行ってきました。

* 年度当初の WITH メンバーでの研修



* 地域座談会



* 挨拶ポスターの作成



地域座談会で出た意見を基に、地域の方と一緒に挨拶ポスターの作成に取組ました。座談会では「挨拶をしても返してくれない大学生がいる」「こちらから声をかけるのにも勇気がある」という地域の方の意見がある一方で、「大学生、高齢者関係なく、地域住民ひとりひとりが、自分から挨拶をしよう、という意識が大切なのではないか」という意見も出ました。そこで「そのような意見を活かそう」という地域の呼びかけがあり、このような挨拶ポスターをつくる流れになりました。このポスターは、大学生がデザインしたものです。近日中に地域に掲示される予定です。

これまで様々なイベントを企画し、私自身は、地域の方との交流も増えてきました。これまで、イベントの度に、大学生に参加を呼び掛けてきましたが、なかなか人が集まりませんでした。WITHのメンバー以外の大学生にも地域の人とつながりをもってもらうために、私たちにどのようなことが出来るのか、これからしっかり考えていきたいと思えます。

2) 読み聞かせサークル「結（ゆい）」の活動

本を通して人と人を結ぶ。そのつながりの輪を広げる。をテーマに「ボランティアやってみたいけど、どんなものがあるの？。絵本が好き！」という仲間と活動している。

《主な活動》

- ・毎月第二土曜日の勉強会(大学図書館にて)
- ・大分市府内こどもルームでの読み聞かせ
- ・各メンバーそれぞれの活動(小学校など)



その他、様々な場所での読み聞かせ、自らが企画したおはなし会等、開催可能です！

子どもと本を結ぶあなたへ あまんきみこ氏 童話作家の想い～一冊の本ができるまで～

平成25年度は、「ゆい（結い）」人と本を結ぶ読書支援プロジェクト事業として10月30日、大分大学高等教育開発センターと大分大学学術情報拠点（図書館）主催による講演会に共催として携わりました。

この講演会には定員をはるかに超える申し込みがあり、読み聞かせのボランティアの皆さん方及び学生たちの熱い想いが伝わってきました。

講演会終了後の交流会にも多くの方が参加してくださいました。その出会いを大切に、読み聞かせ及び読書支援の輪を広げていきたいと思えます。また、我々の活動が「子どもと本を結ぶ人たち」の『いつでもどこでも繋がることのできる交流の場』の足掛かりになればと考えています。



～読み聞かせボランティア活動～

大学の学習支援ボランティアの講義の中で「読み聞かせ」の講習を受けた学生たちを中心に活動しています。毎月第2土曜日に2時間の勉強会を行い、自分たちが読んだ絵本やお薦めの絵本を紹介したり、絵本への想いを語り合ったり、また絵本の評論などを読み合うなどして勉強を続けています。

実際の活動としては、大分市の府内子どもルーム中心に公民館や小学校、育成クラブなどで、絵本の読み聞かせをしています。また、

「協育」アドバイザーの事業である「パパ出番です！育メン読み聞かせ講座」にも積極的に参加しています。「子どもルーム」や「公民館」での読み聞かせは、土曜日ということで平日に比べて参加者は少ないですが、お父さんに連れられたお子さんたちもいて、緊張しながらも楽しい時間を過ごしています。



3) 別府市出身の学生による、後輩の小中学生の学びを支援する「コネクト」

今年の2月から、別府市の小学校や中学校への学習支援を行っています。学習支援を行っている大学生は、別府出身の大分大学の学生です。同じ別府市で育った後輩である子ども達の成長に、私たちが携わることで何か子ども達に良い影響を与えられたらという思いがサークルの発足に繋がりました。私たちの小学生や中学生時代に気づかなかったことなど、今になって「そうーか・・・」と思うことなど、子どもたちと関わりながら伝えていきたいと思っています。

サークル名は「コネクト」。この「コネクト」という名前には、「人と人の繋がりを大切にしていきたい」という思いを込めました。学習支援といっても、勉強を教えるだけではなく、子どもたちと一緒に遊ぶことで思いやりの心を育てたり、私たちの子どもの頃の遊びを教えたりと、勉強や遊びを通して友達の大切さや、別府の素晴らしさなど、様々なことを子ども達に伝えることを目標にしています。

<別府市立石垣小学校学習支援活動の例>

《支援活動後の学生の感想》

◎子どもにとって「よかったなー」と感じたこと

- ・大学生という存在を身近に感じることで、大学生という存在に憧れを感じる事が出来たようだ
- ・多くの先生がいたことで、教え方も様々であり、子どもたちにとって最適な方法が見つかりやすかったのではないかと
- ・いつもと違う環境で勉強できたことで、勉強に対するイメージが良い中で学べたのではないかと
- ・いつもと違う先生（大学生）と触れ合うことで、子どもたちは新鮮な気持ちで、素直に教えてもらう事が出来たように感じる。また、いつもより楽しかったのではないかと感じる
- ・先生（大学生）の人数が多いので1対1で教える事が出来た
- ・担任の先生と学生という違う立場に立つ人が同じように教えると雰囲気異なるのだろうと思う。

そのことから自分の意識次第で勉強に対する意気込みが変わるということを感じ取ってもらえたのではないかと思うこと

◎子どもに気を付けて欲しいこと

- ・わからない問題は「からない」と言って欲しい
- ・子ども自身が気づいていくような、思いやりをもってお互いに教え合う友達づくりをして欲しい

◎あなたにとって良いことがありましたか

- ・1日・2日・・・と教えていくうちに、効率の良い教え方を学ぶことが出来たこと
- ・自分自身が育った地域に貢献でき、子どもたちも楽しく学んでくれたと感じることが出来たこと
- ・子どもへの対応の仕方を学ぶことが出来たこと
- ・子どもだからといって、軽くあしらうことは出来ないと感じたこと

◎その他

- ・子どもたちをどこまではしゃがせるのか、コントロールする力が、大学生も学ぶ必要があると思った
- ・その日に解く問題に先に目を通すことで、効率よく教えることが出来るようになった
- ・課題の準備を早めにしてもらえてありがたかった
- ・先生たちが、優しく丁寧に接してくれたので助かった。そして、先生たちが児童の能力状態を把握し、事前に教えてくれたのがよかった。また、問題に関する情報を活動前に簡単に教えてくれるだけでもやりやすさが違った
- ・意外に時間が過ぎるのが早かった



(4) 大学教育と生涯学習の接続・連携

1) 生涯学習・社会教育に関する授業の実施（教養教育）

【生涯学習論入門】

生涯学習に関する基本的理解を得、大学の授業なども含めて自分の学習を経営し、展開するための視点を獲得することを目的として、生涯学習に関わる諸側面を講義した。25年度より大分県子ども子育て支援課との連携により、授業の中の2回分を「ライフデザイン講座」として地域講師を活用して実施した。5月20日と27日の両日、社会保険労務士で様々な社会的活動を展開している西村慶治氏に、27日はさらにルンビニー保育園の大原麗子氏、徳丸米穀店の徳丸純子氏に加わって頂き、子育て支援の立場や子育て中の親の立場から、どのような

ライフデザインを持ちつつ取組を行っているかを話して頂いた。学生達にとってはまだ遠い将来の話として興味を持ちにくいのではないかと危惧していたが、講師陣の迫力のある話しぶりに思いの外高い関心を持ってくれた。

【社会教育から見た「教育の協働」】

より豊かな学校教育活動を支援するための地域住民の活動のあり方、教職員の意識について、調査研究資料等を参考にしながら、演習と講義をした。

【成人教育方法入門】

人格が確立した成人への教育の方法について、ファシリテーターの育成という観点から演習と講義をした。

【学習ボランティア入門】

きつちよむフォーラムで学生から要望があったボランティア活動を単位化する授業として、ボランティア活動を中心とした授業であり、その構成をする。

①講義：4時限（授業趣旨、学習ボランティアの意義・心得等）

②活動：9時限（13時間以上）

※実際に地域へ出かけて子どもや高齢者等に関わるボランティア活動を行う。

③振り返り：2時限（ボランティア報告会とまとめ）

2) 本学及び学部の授業・講習との接続

【大分の水Ⅰ】 【大分の水Ⅱ】 【里海と里山】

これらの科目は、平成21年度選定大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の推進—学生の社会性向上を図る総合的教養教育の実践—」（以下水辺GPと略記）の取組として行われている授業科目であり、水辺GPの事務局員である岡田が関与している。具体的には、【大分の水Ⅰ】および【大分の水Ⅱ】では、週末に行われる地域体験活動プログラムのコーディネートや運営を行い、あわせて環境学習や川端（かばた）に代表される自然共生型のライフスタイルについて講義を行った。【里海と里山】では、学生を対象に行われる集中講義を企画運営するとともに、現地でのワークショップで役割を分担した。教室では意欲が高くない学生であっても、現地で地元の人々の指導を受ける際には意欲的な姿勢を見せる傾向があり、想定以上の効果を得ることができた。

【プロジェクト型学習入門 1～インターンシップセミナーB～】 【プロジェクト型学習入門 2～インターンシップセミナーB～】

大学で学ぶ力を付けさせるため、また社会人として必要な力の基礎を修得させるため、プロジェクトを自ら企画し、実行することで、企画力、提案力、コミュニケーションスキルなどの向上を図っている。今年度は、前期の授業で「大学生協新商品開発」と「カタリバ」、後期の授業で大分サポートステーションと連携し若年無業者のコミュニケーションスキルを向上さ



せる取組としてカードあわせゲームの開発が行われた。かなり長い時間の補習・打ち合わせを含め、内容の濃い学習が展開された。その結果、前期の「大学生協新商品開発」では、「バリうま野菜たべやさいフェア」が1週間開催され、その内の1メニューは九州大学生協の「アイデアメニュー」に入選し、各大学生協で提供された。

【教師学】（複数教員）

1年生の「教師学」は、平成22年度からのカリキュラムの再編成で始まった科目で、教員免許状取得の必須で、教員としての学びを計画付ける導入科目として設定された。求められる教師像を探る中で、自らが目指す教師像について、生涯学習の観点から社会教育との連結という視点での指導を行った。

【教員免許状更新講習】

中川が現職の教職員の免許状更新講習において、必須科目である「専門職たる教員の役割」の講座（4コマ）及び、その講義内容をさらに演習等で深める「社会教育と学校教育の連携」という選択科目（4コマ×2回）を担当し、学校教育を行う教員の役割に加え、それを更に充実するための社会教育との連結という視点での講義を行った。

また、岡田が選択科目「学校と家庭、地域の協働方策—子育てを手がかりに—」（4コマを担当）を担当した。学校と家庭、地域が協働するための方策について、主として子育てに関わるという部分に焦点化して講義した。続いて、大分地域で子育て支援を行っている「子育てネットワークおおいた」の2名のメンバーとともにパネルディスカッションを行い、地域で起きている子育ての課題を具体的に検討した。最後にグループワークにより協働に向けた行動計画の策定を行った。

3) 文部科学省事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の教養科目授業

○授業のねらい

本授業は、中堅、中小、ベンチャー企業等との連携を密にして、インターンシップ（就業体験）を行うもので、講義・職場体験・取材活動・企業の魅力発信の4つで構成する。さらに、定められた履修認定期間のみでなく、事前・事中・事後も自主的な学びを行うなどしてインターンシップを効果的に行うことにより、学生の進路選択等の視野を拡大し、自分自身の将来についてキャリアをデザインしていくための実践的インターンシップを体験する。このことをとおして、インターンシップにおけるミスマッチを防ぎ、企業と若者の就職におけるミスマッチをなくすことをねらいとする。

但し、底辺の学生をいかにインターンシップに行かせるか、単にインターンシップということではなく、4つの学びをとおしたキャリアデザインの基礎的な力を学ばせることを狙いとしている。さらに、学部の異なる学生が交わることや、企業にとってもメリットがある「企業用インターンシップのプログラム」づくりも視野に入れて授業を行う。

○科目名 「中小企業の魅力の発見と発信」

○受講生数：13名

○事業の目標

- ① 授業を通して身につけることができる社会人基礎力（別途評価資料）を有する。
- ② 十分な学びの足跡（活動、成果、自己評価、他者評価など）として記録し、職業選択に関する

基本的な考え方を、職業と関連づけながら自分の生き方を他者に説明できる

- ③「職場の魅力、職場の楽しさの重要性、人とのコミュニケーションの大切さ」に関する気づきを、職場体験の関係者・他の受講生との交流エピソードをもとに他者へ説明できる。
- ④魅力発信に必要な素材を適切に収集し、受け手（就職活動をしようとする者）にアピするメディアを制作できる。

○授業実施に係る協力依頼先

- ①大分県中小企業家同友会
- ②大分県「協育」ネットワーク協議会

○事前準備説明会

- ① 6月26日（水）・27日（木）12:20～事前説明会をして受講生を募集する。
- ② 7月2日（火）16:00までに中川教授へ履修届を出す。

○事前時間外学習（2～3人1組）

- ①職場体験受け入れ先一覧から、体験先を選択するためにHP等で業務内容等を調べて決める。

→7月2日（火）16:00までに中川へ報告※ 早いのが優先！

・希望する職場体験先 ・メンバー ・班長

（重なる可能性があるので研究室へ来室または電話）

- ②職場体験先との事前打ち合わせ（7月10日～12日の間）

・基本は自分たちで通勤するので、通期に関するアドバイスをもらって、職場体験先と日程等を決定してよい。（自分たちで通勤できない場合は、大学の送迎バスの検討が必要なので、調整して期日を最終決定することになるので打ち合わせをして予定をすぐに連絡する

○授業プログラムと担当

* 講義

講義第1日:8月20日（火）2時限～4時限 教養教育棟28号教室

中川忠宣（大分大学教授） 松倉由紀 CDA

2時限目

担当者「中小企業の魅力の発見と発信」授業のガイダンス ※社会人基礎力事前調査

3時限目「キャリアデザイン入門」

<概要>

職業観を醸成し自身のキャリア形成を目的とし、人はなぜ働くのか、自分はどのように働き、生きたいのか、自身の働く価値観を考えるきっかけを作る

4時限目「メディアの作り方」

<概要>

企業への実践的インターンシップを経たプレゼンテーションに向け、どのように取材し、情報を編集するのかといった技術をプロのメディア制作者から学び、企業研究の視点を身につける。

講義第2日:8月21日（木）1時限～3時限及び時間外

企業経営者による講義 教養教育棟28号教室

1時限

(株)光建エンジニアリング 塚崎 伸一代表取締役

2時限

(株)日田ビル管理センター 長 信明代表取締役

3校時限目（職場体験打ち合わせ）

※時間外：職場体験の目的や取材に関する目的について班協議

*職場体験（中小企業家同友会へ依頼中）8月27日（火）頃～9月6日（金）頃

○事前学習と事前打ち合わせ，出勤方法等の計画を立てておく

- ① 1企業あたり参加者数：2～3名
- ② 3日以内の職場体験（製造・運搬・販売等）
- ③ 半日～1日の取材

※体験企業の魅力について就職活動をしようとする大学生にPRするポスター・プロモーションスライド等の作成をするための映像撮影やインタビューなどの活動を行う

○取材計画，ナレーション，絵コンテ・ポスター構想を作成しておく

○体験企業の魅力をPRするポスター・スライド等の作成をするための映像撮影をする

*メディア作成とまとめ 9月10日（火）教養教育棟会議室1

講義演習第3日：12～15（1時限目～4時限目）教養教育棟 高等教育開発センター

【ポスター作成】各自でイメージしたPRポスターを作成

指導者：株式会社プラン・プラン 代表取締役 河野葉子氏 一瀬奈緒子氏

【プロモーションスライド作成】1つの企業をPRする2分～3分程度のスライドを作成

指導者：高等教育開発センター講師 末本先生

※社会人基礎力事後調査と総括：担当者

○評価

*発表とグループ討議

9月13日（金）10：00～12：30 成果発表会 教養教育棟27号教室

【参加者】学関係者等各指導者・企業関係者・作品作成講師・NPO法人関係者・受講学生

【内容】①作成したメディアの紹介（各班5分）・・・いかに企業の魅力を発信できるかがポイント

- ・ポスター作成班は，代表者が発表し，他の学生はグループ討議で発表する
- ・プロモーションスライド作成は，映像の放映と若干の補足説明をする

②グループディスカッション

- ・授業に関する感想や職場体験で学んだことなど，学生同士の意見交換や大人からの質問を含めたディスカッションをする

*報告書「中小企業の魅力の発見と発信の記録」の提出

○授業から見る評価

*社会人基礎力の調査

①松倉由紀キャリア・ディベロップメント・アドバイザーへの委託調査（学生評価を通じた授業改善）

*授業記録から見る学生の分析

（5）情報収集提供・学習相談活動

1）情報収集・提供

○平成21年度末に本センターホームページの生涯学習関連をリニューアルしたHPを活用して，

年度当初には年間計画を掲載すると共に、年間を通して各講座等の詳細情報とその実施報告の日常的な更新をした。

＝大分大学高等教育開発センター生涯学習関連ホームページの構成＝

概 要：①生涯学習支援の概要 ②年度事業計画 ③研究資料 ④生涯学習情報
県民の皆様へ：①公開講座の紹介 ②公開授業の紹介 ③各種学習機会の紹介
学生の方々へ：①ボランティア情報 ②学習ボランティア申し込み ③学習支援
お問い合わせ

○平成 25 年度に、県内の様々な青少年の育成に関係する情報を一元的に提供する「おおいた『協育』ポータル」を開設した。

＝「おおいた『協育』ポータル」の構成＝

- ①大分大学の窓：大分大学高等教育開発センターが担当する研修事業・活動情報の提供
- ②活動情報の窓：大分内外の研修・イベント情報の提供
- ③学びの窓：「協育」の推進に関する資料の閲覧・ダウンロード
- ④組織・団体の窓：国・県・団体等の情報へ繋ぐ

4つの窓から、県民の加太型へ「協育」の推進に関する情報を提供するサイトとして、今後、日常的な情報提供を行っていく準備をした。

○紙媒体の情報提供については、ホームページで公開講座・公開授業の受講者募集や公開講座の授業・活動風景を含めた活動状況の報告などに加えて、公開講座・公開授業パンフレットを前期、後期別に2回作成して、大分市を中心に配布したり、センターが主催する各種講座については別途チラシを作成して事業ごとに募集をするなどして、広く県内全体への広報を行った。また、平成 23 年度からの取組としては、公開講座・公開授業の広報を新聞チラシに挿入しての配布を行うなどして、幅広く広報を行って情報の広がりを図った。

2) 学習相談

社会人の学習活動へのアドバイスや学生の授業や卒業論文、就職活動等の生涯学習に関わる内容について、資料を提供するなどして相談活動を行った。

(6) 学内のネットワーク化

1) 部門会議の充実

年度当初の年間実施計画の協議、後期における各種取組計画等について、部門長から提案して審議するとともに、個別の案件については、関係する部門委員に相談するなどして生涯学習関連の取組の充実を図った。

2) 生涯学習支援に関する教員のネットワーク化

公開講座の実施については、各学部の計画での実施や教員が自主的に実施するなどのシステムがある。さらに、大分水フォーラムを通じた連携やセンターが各課題に対応する講座、市町村と連携・協同で実施する講座・調査研究においても一定のネットワークが出来ている。そう

した中、平成 25 年度から「とよのまなびコンソーシアムおおいた『連携講座』」の「豊の国学」の実施にあたって、各学部から 1 名の講師を選任する取組を行うこととした。学部から選任された教員が「中央講座」と「分野別講座」の専門分野での講義を行うシステムが出来上がった。

(7) 地域生涯学習支援システムの整備

本センターの役割として、県民の生涯学習を支援するシステムづくりや、その中で重要な役割を果たす社会教育関係職員、指導者・ボランティアなどの力量の向上に取り組むことで、間接的に地域住民の学習を支援することが重要であることから、そうした連携のシステムをとおしての地域貢献を行うために次の取組を行った。

1) 生涯学習支援ネットワーク化の取組

①県及び市町村教育委員会とのネットワークづくり

県教育委員会社会教育課や県立社会教育総合センターと、個別の施策に関する打ち合わせ会を実施するなどして、連携を深める取組を行った。さらに、本センターが実施する各種取組について市町村事業と協同で実施するなどして市町村との日常的な連携を取りながらネットワーク化を図った。

②県内高等教育機関のネットワーク化

「とよのまなびコンソーシアムおおいた」の生涯学習関係事業（連携講座）において 3 回の分科会を行う中で、各学校の現状を把握するとともに担当者との意思疎通を図ることができた。さらに、「豊の国学」としての体系的な講座を提供するシステムが出来上がった。今後、大分県教育委員会との連携・ネットワーク化について引き続き検討することとしている。

＝豊の国学講座の概要＝

○「豊の中央講座」

【人】 瀧廉太郎再発見！

＜講師：大分県立芸術文化短期大学教授 小川伊作＞

名曲「荒城の月」や「花」が今に歌い継がれる瀧廉太郎はどのような環境で音楽を学び、このような名曲を作曲したのでしょうか。またその運命は？ 瀧廉太郎の音楽的環境を吟味し、彼の残した音楽のすばらしさについて思いを馳せます。

【文化】 アダプト・プログラムを活用した豊の国づくり

＜講師：大分工業高等専門学校教授 亀野辰三＞

「アダプト・プログラム」（里親制度）は、大分県内における“官民協働”型の地域づくりに貢献しています。

【文化】 くにさきの重要文化的景観と農業遺産

＜講師：別府大学教授 飯沼賢司＞

田染荘の文化的景観と農業遺産としての価値について語ります。

【文化】 大分の道

＜講師：立命館アジア太平洋大学准教授 轟博志＞

古代より大分は海陸交通の要衝として、様々な目的・機能・行先地を持った道路が交錯していました。古道を地域資源としてどう発掘し活用するか、事例を交えて紹介してみます。

[文化] 大分県の中の朝鮮半島 <講師：別府溝部学園短期大学学長 溝部 仁>
宇佐八幡宮の出発点いもいわれる御許山と朝鮮・中津大貞八幡宮と朝鮮との関係や宇佐八幡宮最大の祭祀である行幸会と朝鮮について考察します。

[産業] 東九州メディカルバレー構想の紹介 <講師：大分大学教授 穴井博文>
大分県・宮崎県及び同地域の大学、企業との産学官連携による、血液・血管に関する医療機器産業発展プロジェクトにおける大分大学の取組を紹介します。

[産業] 大分の創業支援と元気な企業 <講師：日本文理大学准教授 工藤順一>
大分県におけるベンチャー創業支援施設を紹介するとともに、創業支援の内容や施設を卒業した元気な企業等を紹介します。

＝分野別講座＝

[豊の産業講座]

- ①大分県の産業と企業 <講師：大分大学教授 松尾純廣>
- ②科学の目で見た「関さば」のおいしさの秘密 <講師：大分大学教授望月聡>

[豊の文化講座]

- ①大分の国際化（英語と日本語の2言語で講演）
<講師：大分工業高等専門学校助教 Tomek Ziembra>
- ②明治から昭和の新聞記事で見る大分県 <大分大学准教授 中島誠>
- ③大分のキリシタン <講師：別府大学教授 田中裕介>

2) 市町村・団体等との共同・連携事業※他のページで報告

- ①大分大学米水津塾（佐伯市）
- ②「教育の協働」推進のための公開講座（玖珠町）
- ③<「協育」見本市>第7回 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会
(東国東地域デザイン会議)
- ④あまんきみこ氏講演会『子どもと本を結ぶあなたへ』 童話作家の想い
(NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット)

(8) 生涯学習推進と社会的活動の取組

県及び市町村教育委員会生涯学習行政等と連携して、生涯学習・社会教育に関する調査研究の成果を普及・還元するとともに、本センターが持つ各種情報等を生かした生涯学習の推進とともに、センターとしての社会的活動による地域貢献の取組を行った。

1) 県教育委員会生涯学習・社会教育行政との連携

＝生涯学習関係者研修事業＝

【県教育委員会及び県立社会教育総合センター等研修事業】

教職員研修，コーディネーター研修，おおいた学びの輪推進事業における講師やファシリテーターとしてセンター教員2名が担当した

＝委員等への就任＝

【県立社会教育総合センター関係】

○調査研究委員（中川）

「教育の協働」の効果的な推進に関する調査研究に関する委員として，調査の企画にあたった。

○研修講師担当（岡田）

社会教育担当職員初級研修

【大分県関係】

○大分県協働推進会議委員長（岡田）

○大分県新しい公共支援事業運営委員会委員長（岡田）

○大分県青少年健全育成審議会副委員長（岡田）

○おおいた共創応援基金理事（岡田）

2) 市町村教育委員会生涯学習行政との連携

＝生涯学習関係者研修事業＝

○大分市南部公民館「おやじの夜なべ談義」コーディネーター（岡田）

＝委員等への就任＝

○由布市指定管理者選定委員会委員長（岡田）

○大分市あなたが支える市民活動応援事業選考委員会委員長（岡田）

○大分市PTA 連合会人権教育研修講師（岡田）

3) 国，都道府県，市町村，大学，団体，機関等との連携

【文部科学省事業の推進】

※詳細は「協育」事例集教育の創造～地域「協育」のススメ（第3巻）（大分大学高等教育開発センター発行）をご覧ください。

①平成25年度文部科学省委託事業「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」
「おんせん県おおいた・別府型ドリームプロジェクト」事業概要

「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」の推進にあたって，大分大学は「センターオブコミュニティ」としての役割を担う1つの事業として，別府市の活性化，さらに大分県が進める「おんせん県おおいた」の推進の一翼を担うために中心的な役割を行った。大分県における唯一の国立系大学として中核的役割を担っている。こうした考えのもとに，本学高等教育開発センターがその事務局を担って本事業を中心的に推進した。

特に，本事業を推進するうえで，別府溝部学園短期大学を基盤として，図を前提としたプロジェクトの組織化とともに，プロジェクトを中心とした以下の成果があったことは，次年度以降の「温泉コンシェルジュ」養成の基盤が出来上がったと考える。

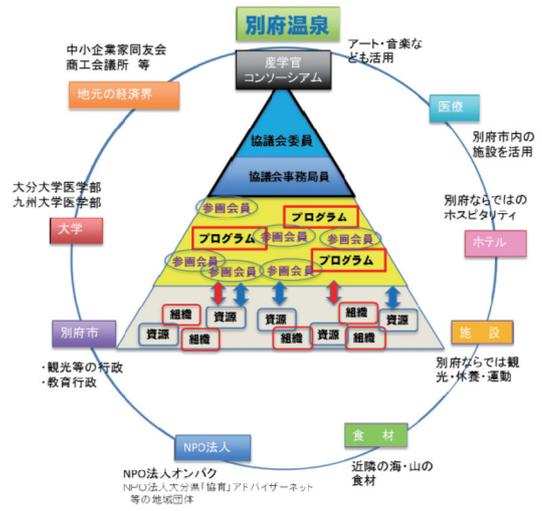
<成果と事業実施の課題>

(1) 成果

- ①「温泉コンシェルジュ」の養成に関するカリキュラム作成をとおして、県内においてこれまで見られない充実した専門科目ができた（関係者の声）ことにより、高等教育機関の教育機能の充実に期待できる。
- ②高等教育機関の人材育成と地域が求める人材とのマッチングのテーブルが出来た事による今後の議論、就業への直接的な繋がりを視野に入れた教育活動への可能性が広がった。
- ③分野の異なる関係機関や専門家のネットワークが出来たことにより、この機能を他の分野の活用にも期待できる。
- ④委員及び別府溝部学園短期大学の教員等が、本物のコンシェルジュの講演を聴講することによって、本事業が目指す「コンシェルジュ」養成の方向性を確認できた。

(2) 課題

- ①作成された教育プログラムのスムーズな実施のための、幅広い協力者・支援者の確保とネットワークの拡大が必要である。
- ②実施者である別府溝部学園短期大学を主体とした今後の運営システムづくりの検討が必要である。
- ③入学生募集と、別府市を中心とした大分県内の温泉地における就業のシステムが必要である。



②平成25年度文部科学省事業「学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究」

「泉都別府「協育」プロジェクト」事業概要

別府市では、家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的とし「別府市地域教育力活性化事業」実施してきた。さらに、平成25年度から3年計画で、全ての小中学校をコミュニティ・スクールに指定して、地域の教育力を活用して、家庭・学校・地域が一体なって子育てをする街づくりの取組を始めた。その取組をNPO法人大分県「協育」アドバナーネットと協働で支援した。

①コーディネーター機能の向上の取組

この施策を推進するためにはコーディネーター機能をどう構築するかである。そのために、これまでコーディネーター機能の中心であった公民館職員を始め、教職員、地域の関係者を対象とした「ボランティア活動を促進するための研修会」（コーディネーター養成）を開催する。

②放課後等の継続的・体系的なプログラム開発と提供の仕組みづくり

ふるさと別府を学び、お客様へのおもてなしの心が育つ児童生徒の育成をめざし、学校教育課程・放課後等で使用することができる教育プログラムの開発や実践的検証をおこなう。

③産学官民など多様な主体による学校と地域の双方の活性化のための仕組みづくり

- ①と②の実践を通じた、産学官民のネットワーク強化をめざした。

【生涯学習関係者研修事業（主なもの）】

- 鳥取県コミュニティースクール研修会（中川）
- 平成 25 年度全国公立学校教頭会研究大会（中川）
- 平成 25 年度文部科学省「地域とともにある学校づくり推進フォーラム」（中川）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成 24 年度社会教育主事講習 A 特講「大学機能の開放と拡充」担当（岡田）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成 24 年度社会教育主事講習 B 特講「生涯学習の推進とまちづくり」「地域総合計画と社会教育計画」担当（岡田）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成 24 年度全国生涯学習センター等研究交流会講師（岡田）
- 広島大学社会教育主事講習「大学と地域社会」，「高等教育と生涯学習」担当（岡田）
- 宮崎県社会教育委員研修講師（岡田）
- 山口県公民館連合会西部地区公民館職員研修会（岡田）
- 九州公民館大会分科会助言者（岡田）
- 愛媛県南予教育事務所社会教育関係職員研修（岡田）
- 広島県生涯学習実践研究会基調講演講師（岡田）

【委員等への就任】

- 大分県マリンカルチャーセンター管理運営委員（中川）
- とよのまなびコンソーシアムおおいた生涯学習分科会長（中川）
- 中国・四国・九州生涯学習実践交流会大分県実行委員（中川）
- 地域発「『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」委員及び事務局員（中川・岡田）
- 文部科学省生涯学習政策局社会教育課「公民館を中心とした社会教育活性化事業」審査委員（岡田）
- 子育てネットワークおおいた代表（岡田）
- おおいた水フォーラム事務局（岡田）

（9）調査研究及び刊行物

①＝「協育」事例集＝「教育の創造～地域『協育』のススメ」（第3巻）

（大分大学高等教育開発センター編集）

＝「協育」事例集＝教育の創造～地域『協育』のススメ～は、本センターの調査研究や指導者育成事業などの主催事業を中心に、県内の各種団体等の活動事例や大分県教育委員会の取組を紹介して、教育の協働を推進する資料としていただくことを目的に刊行してきた。

「地域総参加で子育てのまちづくり」は多くの地域でアドバルーンを挙げている。しかし、どうすれば「総参加が推進できるのかわからない」という悩みもよく聞く。様々な情報を活用しながら、大分県における「教育の協働」の第1歩、さらに「前進」の取組が進められることを願って第1巻、第2巻に引き続いて、「地域『協育』のススメ（第3巻）」を発刊した。

「第3巻」は、これまで本センターが取り組んできた実践を中心に、大分県教育委員会の取組

も紹介している。「第1巻」「第2巻」と併せて今後の取組の資料としていただくことを願っている。

県内の行政・機関・学校・企業・地域住民，そして各種団体・グループのネットワークによる「地域総参加で子育てのまちづくり」は始まったばかりだが，着実に広がり，定着している。しかし，それは子どもたちを育てる役割を担う大人の意識次第であり，そのため活用していただく資料である。

第1章 教育の創造～地域「協育」のススメ・その3～

本を結ぶあなたへ～童話作家 あまんきみこ氏の世界から学んだもの～

第2章 大分大学高等教育開発センターの取組

第1節 主催者として実施した事業のあゆみ

事例1 「『協育』アドバイザー養成講座」の取組の紹介

事例2 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会での「協育」の事例紹介

第2節 協働の主体として別府市で実施した文部科学省事業の推進事例

事例1 学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究

(学校・家庭・地域の連携協力推進事業)

※大分県における事業名：泉都別府「協育」プロジェクト事業

事例2 平成25年度「成長分野における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」

※大分県における事業名：おんせん県おおいた・別府型ドリームプロジェクト事業

第3節 大分大学生の学びの事例報告

1. 地域住民の中で学ぶインターンシップ授業に関する調査分析の報告

事例1 社会人基礎力の育成に係るインターンシップと学習ボランティアの比較研究

事例2 キャリア形成に有効的に働くインターンシップ授業に関する研究

2. 大分大学生学習ボランティアサークル「フォーバル」の紹介

事例1 読み介せサークル「結（ゆい）」

事例2 地域住民との交流を進める「WITH」

事例3 別府市出身の学生による，後輩の小中学生の学びを支援する「コネクト」

第3章 大分県教育委員会が進める「協育」ネットワークの推進について

1 大分県における地域「協育」推進の取組

2 大分県立社会教育総合センター調査研究事業

資料1：コミュニティ・スクール実施のための資料

資料2：おおいた「協育」ポータルの紹介

②「教育の創造～地域『協育』のススメ」「童話作家あまんきみこ氏の世界から学んだもの」

(大分大学高等教育開発センター編集)

平成25年10月30日(水曜日)に大分大学高等教育開発センター及び大分大学学術情報拠点(大学図書館)の主催，NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの共催で，あまんきみこ氏講演会「『子どもと本を結ぶあなたへ』童話作家の想い～一冊の本ができるまで～」を開催した。

本講演会は，童話作家「あまんきみこ」氏の童話への想いをとおして，地域でのボランティア活

動として大切にされている「読み聞かせ」などの読書支援活動についての意識の醸成を目的とて開催した。一般のボランティアの方々にも作家の生の声（「想い」）を聞いていただき、読み聞かせの悩みも語り合うなどして、みなさんの横の繋がりを作るお手伝いをしたいという想いからである。その講演の概要や交流会での感想等についての参加者の方々の「声」を整理しながら、「子どもと本を結ぶ活動」をテーマにして「地域『協育』のススメ」を考えてみることを目的である。それぞれの地域で、子どもたちへの読み聞かせや学校図書館活動への支援、読み聞かせの大切さを保護者へ広める活動等をしている方々への応援メッセージとしてなることを願って発刊することとした。

（10）大学開放・生涯学習支援における国内の動向～研修・会議を通して～

平成 25 年度は、平成 26 年度に予定している「コミュニティ・スクールのコーディネート機能に関する全国調査」の準備のために、既にコミュニティ・スクールの指定を受けている学校を中心に、下記の 5 つの学校を視察した。その中の「5. 由利本荘市立矢島小学校」の概要を報告する。

【京都市内のコミュニティ・スクール視察研修】

1. 京都市立開晴中学校（小中一貫教育校，23 年度開校，CS）
2. 京都市立藤城小学校（平成 17 年度から CS）

【奈良県，奈良市のコミュニティ・スクール視察研修】

3. 香芝市立二上小学校長（研究指定校）
4. 奈良市立三笠中学校（導入校）

【秋田県由利本荘市のコミュニティ・スクール視察研修】

5. 由利本荘市立矢島小学校

（1）背景と現状

本校は旧矢島町立小学校で、矢島町時代は小学校 1 校，中学校 1 校で小学校から中学校へ全員進学するという仕組である。地域住民は以前から学校へ非常に協力的であり，子どもへの教育には関心が強い。よって，これまでも学校への協力は非常に大きいものがあつた。また家庭は学校を信頼し，家庭で行うべき教育・躾等の役割を十分に担っている。よって，学校は学校教育に専念できるとともに，地域住民・保護者の協力を得た教育活動がスムーズに展開出来ている。こうした学校においてコミュニティ・スクールを実施する目的は次の 2 つである。

- ① 現在は地域コミュニティが形成されているが将来的には保障できない。よって将来まで続くコミュニティを形成するシステム作りを行うこと。
- ② 複雑・多様化する学校教育において，地域の教育力をより有効に，そして，より広範囲に活用することによって教育活動を充実し教育効果を上げること。

（2）特色

本校のコミュニティ・スクールの取組は，背景と現状に述べたように，地域の教育力をスムーズに活用することが出来る風土があることである。その風土を背景にして以下の取組が特色として上げられる。

① 評価

学校評価に加え、保護者評価及び学校運営協議会評価という関係者評価を行っている。さらにそれぞれの評価を基にした協議を行い、そこから改善策を検討している。

② 年間指導計画を踏まえたコミュニティ・スクール活用のための計画

教育課程における年間指導計画において、各学年・各教科・各月ごとの年間単元配当表に地域教育力の活用プログラムを位置付けている。

③ コミュニティ・スクール運営の組織（システム）

23名の委員が役割分担（組織化）をして学校の組織と連携した運営を行っている。子どもが地域の大人と関わりやすい場の保障をし、地域の一員としての意識を育てる取組を運営協議会が担っている。一方通行の学校支援ではなく、学校と地域が連帯して協働作業を行っている。さらに、学校内に設置した学校支援地域本部との連動により日常的な学校支援活動も充実出来ている。

④ コミュニティ・スクールの3つの柱

- ・地域住民の学校運営参画
- ・地域力を活かした学校支援
- ・学校力を活かした地域づくり

それぞれの柱は全て学校と地域の連帯という基本的な考え方の上に立って取り組まれている。

⑤ 教員の教育に関する専念

コミュニティ・スクールはややもすると教職員の多忙化に繋がるという考えが表面的に議論されるが、本校においてはこれまであった様々な会議をこのコミュニティ・スクールの運営にあわせて整理統合することによって、会議打合せ等の多忙化を解消している。さらに学校担当者（教頭）を窓口としており、その窓口から日常的な支援者が得られるという仕組みになっている。その際教頭は、学校支援地域本部のコーディネーターと繋がっており、実際のコーディネート機能はそのコーディネーターが担っていることにある。

⑥ 学校運営協議会委員の選任

委員の選任にあたっては様々議論され、課題となるところにあるが、本校においては地域を知ることが前提として校長が（思いのある人）に依頼している。このことは学校運営協議会をより効果的、よりスムーズに運営していく上で重要であると考えている。

⑦ 学力とコミュニティ・スクールの関係

秋田県教委はすべての義務教育学校において「皆の登校日」を設けている。月に1回のこの日は保護者も地域住民も自由に学校に来て、学習活動の参観や子どもとの交流を行っている。このことにより、子どもも地域の人へ感謝の心を持つとともに、地域住民・保護者も子どもへの関心・愛着を持つという効果があるという。

さらに地域のボランティアを授業等の中に入れることによって、子どもにとっては授業が楽しくなるという傾向がある。教員は授業を工夫し、改善していくことに努力している。このことが、学力の向上に大きく繋がっていると考えている。また前述したように地域住民・保護者が日常的にそれぞれの役割を果たしていることが教員の「学力保障」の取組の支援になっていると考えている。

Ⅲ 付 録

1. センター関係諸規則

(1) 大分大学高等教育開発センター規程

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、大分大学学則（平成16年規則第8号）第7条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

(定義)

第2条 この規程において「部局」とは、国立大学法人大分大学部局を定める規程（平成16年規程第14号）第2条第3項第1号に規定する部局のうち、事務局を除く部局をいう。

2 この規程において「部局長」とは、前項に規定する部局を掌理する者をいう。

(目的)

第3条 センターは、学内外の関係機関との連携の下に、高等教育および生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もっと大分大学（以下「本学」という。）における教育及び地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第4条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発に係る業務
- (2) メディア・IT活用関連に係る業務
- (3) FD・授業評価関連に係る業務
- (4) 大学開放推進関連に係る業務
- (5) 生涯学習支援システム関連に係る業務
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な業務

(部門)

第5条 センターに次の各号に掲げる部門を置く。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発部門
- (2) メディア・IT活用部門
- (3) FD・授業評価部門
- (4) 大学開放推進部門
- (5) 生涯学習支援システム部門

(職員)

第6条 センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) センター員

(センター長)

第7条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長は、本学の教授のうちから、大分大学学内共同教育研究施設等管理委員会（以下「管理委員会」という。）の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター次長)

第8条 センター次長は、センター長を補佐し、センター長に事故があるときはその職務を代行する。

- 2 センター次長は、本学の教員のうちから、管理委員会の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター次長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター次長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第9条 専任教員は、教育研究に従事するとともに、センターの業務を行う。

- 2 専任教員の選考は、管理委員会の議に基づき、学長が行う。

(部門長)

第10条 部門長は、センター長の指示を受け、第5条各号に規定する各部門をそれぞれ統括する。

- 2 部門長は、本学の教員のうちから、センター長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 部門長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター員)

第11条 センター員は、担当部門の研究開発、支援等を行う。

- 2 センター員は、本学の教員のうちから、部局長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第12条 センターの円滑な運営を図るため、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関する必要な事項は、別に定める。

(専門委員会)

第13条 運営委員会に、業務に係る専門的事項について調査及び実施するため、専門委員会を置くことができる。

- 2 専門委員会については、別に定める。

(事務)

第14条 センターに関する事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第15条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は別に定める。

附 則（平成20年規程第8号）

- 1 この規程は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター規程（平成16年規程第134号）及び大分大学高等教育開発センター規程（平成17年規程第12号）は廃止する。

(2) 大分大学高等教育開発センター運営委員会細則

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この細則は、大分大学高等教育開発センター規程（平成20年規程8号）第11条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 委員会は、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の円滑な運営を図るため、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの運営に関する事項
- (2) センターの事業計画に関する事項
- (3) 部門間の連絡調整に関する事項
- (4) その他センターに関する必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) 各学部から選出された教員 各1人
- (6) 大分大学学術情報拠点運営会議から選出された者 1人
- (7) 大分大学地域共同研究センター運営委員会から選出された者 1人
- (8) 研究・社会連携部長
- (9) 学生支援部長
- (10) その他センター長が必要と認めた者

2 前項第5号から第7号まで及び第10号の委員は、学長が任命する。

3 第1項第5号から第7号まで及び第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する者がその職務を代行する。

(会議)

第5条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会の事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第8条 この細則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 (平成20年細則第3号)

- 1 この細則は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター運営委員会規程(平成16年規程第135号)、大分大学高等教育開発センター運営委員会規程(平成17年規程第13号)及び大分大学公開講座専門委員会内規(平成16年4月1日制定)は廃止する。

(3) 大分大学高等教育開発センター紀要刊行規程

平成20年10月10日制定

(趣旨)

- 1 この規定は、大分大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という）紀要（以下「紀要」という）の編集および刊行等に関して、必要な事項を定めるものとする。

(紀要の内容)

- 2 紀要には、高等教育または生涯学習についての未発表の学術論文、研究ノート、報告、翻訳、資料等（実践報告を含む）を掲載するものとする。

(投稿資格)

- 3 投稿者は、投稿日において次の各号の一に該当していること。ただし、共著の場合には、筆頭著者が投稿資格を満たしていればよい。
 - (1) 本学教員
 - (2) 本センター客員研究員
 - (3) 本センターが依頼した人
 - (4) 本センター運営委員会が認めた人

(執筆要領)

- 4 投稿原稿に関する執筆要領については、別に定める。

(刊行)

- 5 紀要は原則として年1回発行するものとする。

(刊行費)

- 6 刊行費は、センター共通費で負担するものとする。ただし、次の各号については、執筆者の個人負担とする。
 - (1) 論文の刷り上がりページ数が20ページを超える場合
 - (2) 別刷が50部を超える場合

附 則

この規定は、平成20年10月10日から施行する。

(4) 大分大学高等教育開発センター紀要執筆要領

1) 投稿枚数

投稿原稿は,単独執筆または共同研究に関わらず,原則として一編につき刷り上がりで20ページ以内とする。刷り上がりで30ページ以内であれば受理するが,その場合には刊行費用について執筆者が応分の負担をするものとする。

投稿枚数は,題目,要旨,キーワード,図表,注,参考文献等を所定の枚数の中に含めて算定することとする。

2) 投稿申込および原稿提出の期限

投稿申込の期限は毎年12月28日とし,原稿提出の期限は毎年1月末日とする。なお,当該日が休日の場合,次の勤務日を期限とする。

3) 審査および掲載の可否

投稿された原稿は,センター運営委員会で掲載の可否について判断された上で紀要に掲載されるものとする。場合に応じて,加筆,修正,削除を求めることがある。

4) 原稿の提出

原則として,原稿はワープロソフトを使用して作成し,プリントアウトしたもの(1部)とファイルを保存したメディアを提出する。

①プリントアウトは以下の書式で作成する。

- ・用紙はA4縦とする。
- ・ページレイアウトは横書きとし,上30mm,左右20mm,下20mmの余白をとる。
- ・1ページあたり,40字×40行とする。
- ・カラー印刷を希望する場合,その旨を明記する。

5) 参考文献

参考文献は原稿末尾に掲載する。雑誌の場合,著者・文献名・巻・号・出版年月・ページを,単行書の場合には,著者・書籍名・出版社・出版年・ページを記入する。

6) 校正

校正は一校を原則とし,必要最低限の訂正,修正に留めるものとする。

7) 別刷

別刷は原則として50部とする。50部を超える別刷を希望する場合には,執筆者が刊行費用について応分の負担をするものとする。

2. 平成25年度高等教育開発センター運営委員会名簿

委員長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）
委員	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
委員	中川 忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
委員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（FD・授業評価部門長）
委員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員（メディア・IT活用部門長）
委員	麻生 和江	教育福祉科学部
委員	西村 善博	経済学部
委員	北野 敬明	医学部
委員	後藤 雄治	工学部
委員	吉田 和幸	学術情報拠点運営会議
委員	劉 孝宏	地域共同研究センター運営委員会
委員	原田 道雄	研究・社会連携部長
委員	村瀬 隆彦	学生支援部長

新規授業・カリキュラム開発部門

部門長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）（部門長）
-----	------	---------------------------

メディア・IT活用部門

部門長	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員
センター員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員
センター員	鄭 娥敬	教育福祉科学部
センター員	藤井 弘也	教育福祉科学部
センター員	相浦 洋志	経済学部
センター員	井上 亮	医学部
センター員	鈴木 義弘	工学部
センター員	吉田 和幸	学術情報拠点

FD・授業評価部門

部門長	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（部門長）
センター員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員
センター員	藤井 康子	教育福祉科学部
センター員	市原 宏一	経済学部
センター員	本谷 るり	経済学部
センター員	横井 功	医学部
センター員	津村 朋樹	工学部

大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

部門長	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
部門長	中川 忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
センター員	藤原 耕作	教育福祉科学部
センター員	仲本 大輔	経済学部
センター員	藤木 稔	医学部
センター員	小林 祐司	工学部

平成 25 年度

大分大学高等教育開発センター報告書

発 行 平成 26 年 9 月

編 集 大分大学高等教育開発センター

〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地

Tel/Fax(097)554-8509

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>